

---

# Story.01 黒のプレリュード

麻生柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Story · 01 黒のプレリュード

### 【Zマーク】

Z6333M

### 【作者名】

麻生柚葉

### 【あらすじ】

一つ、また一つと貴方には大切なものが増えた。

その事が悲しくて苦しくて辛くて、耐えられない心は毒を出す。  
たつた一つ、貴方しか要らない。

大切なものを増やす貴方の心が理解が出来なかつた。  
ねぇ、『 ボクは貴方だけが大切なんだよ 』

共に生きたいと逝きたいと願う事は、罪ですか。  
それは全てのプレリュード

# Prontozone 00 · Prontozone (讀書会)

しのとく Story · 00 Overture の続きのお話になります。

この物語を

私の願いが沢山詰まつたこの物語を

親愛なる君に送る

どうか、どうか

最後まで読んで欲しい

どうか、どうか

最後まで見捨てないで欲しい

どれも愛しくて、どれも大切で

どれも自分の手のひらから零したくなくて  
捨てられなくて、切り捨てられなくて

我儘ばかりの私は、大切な愛する人の幸せを願うよ

だけど、もし自分自身の願いを言ひて良いのなら

沢山の建前と、沢山の虚無に彩られた心の奥底で

たつた一つだけ、私の願いが叶つならば

ただ、私はもう一度君に

会いたい

Prologue 00 · Prologue (後書き)

最初のPrelude  
白黒共通

この世界で一番背の高い塔の上からまだあどけなさの残る少年は窓辺に頬杖をついて愚かな世界を見下ろしていた。

全てを一望出来るそこからの景色は申し分無い程の美しさだらう。しかし、少年の金に染まる瞳にはこの世界に美しさなど感じる事が出来なかつた。

カラフルであるう色は抜け落ちて、モノクロにくすんで見えた。

（馬鹿みたい。こんな事を続けていたつて、何かが変わるわけないじゃん。）

傍らに置いていた片田のウサギの人形を突くと、呆気なく倒れ机から落ちる。

床には同じように落とされた人形達が散らばつていた。

塔の天辺に用意された部屋は華美で豪華で品良く、家具のどれもが質が良い。

一見庶民には手の届きそうの無い豪華な私室。少年・葎那は天に一番近い場所に軟禁されていた。

悪魔にとってそこは一番屈辱的な場所。しかし、その事について葎那は特に何にも思つていなかつた。

むしろ必要以上に誰も寄つて来なくて清々していた。

この軟禁生活は生きていく上では何の不便も無かつた。

行動は制限されているものの、言えば欲しい物は粗方手に入れることが出来た。

紅茶が欲しいと言えば最高級の紅茶が用意され、服が欲しいと言え

ば品の良い老舗のオーダーメードの服が手に入った。

だけど、

(・・・欲しい物はそんな“物”じゃない)  
例え、疎まれ命を狙われる身であつてもこの世界での序列は四位なのだ。

権限を奪われる代わりに、無駄に財が有り余るほど所持していた。  
それでも悪魔はする汚い。

金眼を禁忌だと嫌つておきながら、周りには葎那の位の高さにへ口  
へ口詫い甘い蜜を吸おうとする奴等ばかりだった。  
そして邪険に思い、殺してやうつと企んでいる奴等ばかりだ。

(くだらない。この世界、全てが。

無意味さを知らうともしない、愚鈍なもの全てが。 )

暇で暇で仕方が無い。

頭の脳にサファイアがある為に、記憶力や読解力は人の何倍も優れて  
いる。

既にこの世界の本の知識は粗方全て吸収してしまった。

(この世界の全てを知つて、その愚かさに嘲笑しか浮かばなかつた)  
寂しく無いようにと置いてある人形があつたつて一人で遊ぶのはつ  
まらない。

(だけど、幼い心遣いをする兄が可愛かつた。 )

心地良い天氣だからと言つて昼寝する気分にもなれない。  
(流石に一日にそんなに長く寝てらんないよ)

葎那にとつてこの退屈な場所から抜け出す事など造作もない。

しかし、抜け出す事をしないのは大好きな双子の片割れの存在があつたからだ。

大好きな片割れに迷惑をかけるのだけはびうしても避けたかった。唯一愛してくれた片割れ。色の無い世界でたつた一つだけ色のある存在。

この世界で葎那が唯一愛する事の出来た存在。  
頼もしくも、脆い兄・刹那

（ねえ、せつちゃん。葎はこの世界が大嫌いで憎くてたまらない。だから簡単に縛られて奴等の思い通りに生きる事なんて絶対しない。

屈しないし、負けない。邪魔をするものは消すし、幸せは自分で掴み取るよ。）

「・・・だけどね、せつちゃんを犠牲にしてまで生きていたくなんかないんだよ。」

今頃、彼は何をしているだろうか。

きっと葎那の為に色々動いている事だろう。

いつだって刹那は正面を向いて正しいと思つことに向かつて歩みを止める事は無い。

自信満々に俺に任せるとつた彼に葎那はいつだって何も言えなかつた。

刹那なら、どうにかしてしてくれるような気さえした。

縋つてしまいたくなつた。唯一の人に甘えたかつたのかもしけない。自分と同じ大きさのはずなのに、より大きく見える背中にどうしようもなく憧れた。

だから自分の体の幼さが憎かつた。

同じ年頃の子供より群を抜いて力が強い自信があつた。絶対に負けない自信があつた。

頭脳戦だつて知識量だつて大人に負けない自信があつた。だけど、力ある成人した大人の体力に、戦闘力に勝てる自信は無かつた。

(・・・もつと大人だつたなら!)

葎那とは違い、自由に動ける刹那に迷惑をかけることもなかつただろう。

打開策を共に手を取つて出来る事も沢山あるのだろう。

刹那一人に無理をさせる事も無いのに・・・

(せつちゃん、お願いだから無茶だけはしないで・・・)

いくら大人びていようと、葎那はまだ子供だつた。

そしていくら序列第三位・時期魔王候補の刹那もまた子供だつた。

Chapter 1 Prelude 01・君に、ただ…（後書き）

大好きな憧れの君に、ただ…  
せめてこの思いだけでも届けば良いのに

大人の、しかもお偉い様というものは總じて頭の固い連中ばかりだ。いかにも自分達の意見が正しいと押し通して、曲げない。自分の利益と保身の為に、本当の真実を偽つてどんなにあくどい事だつてやってのける。

魔界の中心部に位置する黒と赤を基調にした財を存分にかけて作られている王家の巨大な城

その大きさにも関わらず、王家と古くから伝わる数少ない名家の血筋しか訪れる事ができない為、普段から閑散としている

そんな城の中でも賑わっている場所があつた。

政治や施策、利害調整から根拠の無い噂話まで話し合ひの部屋、会議室である。

そんな話し合いと言ひ名のくだらない井戸端会議の最中に飛び込んできては不機嫌顔を隠す事無く晒す少年に、大人たちは苦渋の表情を見せた。

揃つていた大人たちは新参者から古株まで多数に渡るが長寿の種族であるため殆どの者の容姿は若い。

チラチラと視線を交し合つその姿は面倒事の押し付け合いをしている事が傍から見てすぐ分る。

会議中の三度に一度の確立で飛び込んでくる少年が何を望んでいるかなんて、この場に居る大人たちの中で知らない者は居ない。やつて来た少年が何を言いたいのかはよく分つていて。そして、返す言葉はいつも決まつていて。

運悪く少年の一番近くにいた悪魔は渋々重い口を開く。

「しかしです、刹那就様。いくら王族といえど禁忌は禁忌です。  
むしろ王族から出でしまったから、これほどまでに重要な問題なのです。」

「そんなの知らない！刹那就は刹那就だろ！！

大事な片割れがあんな扱いされるのを俺は黙つてみてられない！」

いつまで経つても平行線の会話に少年・刹那就は苛立ちを募らせる。大人からしてみれば駄々を捏ねる手の焼ける我儘少年なのだが刹那就にとつては真剣な大問題である。

（理解できない！あんなに綺麗な目の何処が禁忌だつて言つんだ。何色の瞳をしてようが、変わらないのに。何で決め付ける！）

刹那就は刹那就が大好きだ。そして金色の瞳が大好きだ。いくら気丈に振舞つっていてもその輝きが口に口に失われていっている事を知つている。

刹那就以外の全てのものに絶望し、憎しみを持ち始めている事も知つている。

（このままじゃ、あいつの笑顔が消えちまう・・・・！）

それだけはなんとしてでも避けたかった。

時間が・・・時間が無かつた。時は一刻を争つた

刹那就は苦虫を噛み潰したような顔になる。

感情任せに手当たり次第にここにある物を大人たちに投げてしまい

たかった。

自分のこの性格が悪魔らしくないのは昔から分っていた。

自分主義で利益になる他人以外を必要以上に気にかける悪魔は居ない。

そういうつた悪魔たちの中で育つてきても、刹那の性格は変わらなかつた。

悪魔らしく演技している事が殆どだが、自分が異端というのは認めている。

そういうつた意味では葎那の方が余程悪魔らしかつた。

それなのに、魔界の人たちは葎那では無く刹那を選んだ。魔王になるとと言う事は、幼い頃から素晴らしい事だと誇らしい事だと教え込まれてきたけれど

そんなものが自分に合つとは到底思えなかつた。

「駄目に決まつてゐるでしょう。そんな事。

貴方様は次期魔王になるお方なのです。一緒に住むだなんて・・・会いに行くのを控えてもらいたいくらいなのですから。」

いい加減諦めなさいとでも言つよう大きなため息を呆れと共に吐き出すると、この話は終わりだとでも言つよう大人たちは話を元に戻してしまつた。

唇を噛み締めて俯く

強く握りすぎた手のひらが痛い。

（くそつたれ！）

刹那はこちらにもう視線を向けない大人たちを睨め付け

飛び込んできた時以上に大きな音を立てながら扉を勢いよく開けると、刹那はそのまま走り去つた。

何度も同じやり取りを繰り返し、同じ言葉を言われても刹那は決して諦める事は無かつた。

もがいてもがいて、動いていなければやつていられなくて。諦める事など到底出来る訳が無かつた。

こいつは将来利用できるし役に立つから、殺すなど遠い幼き日に殺されそうになる律那の前に立ち宣言した事があった。あの日の事は決して忘れない。

目の前で大切なものを奪われそうになつた事、ギラギラと血走った目をして物騒な武器を手にしていた大人たちの姿を。怯えの感情を映した律那の瞳を見てもう一度とこんな日にあわせないど、絶対に守ると自身に固く誓つた

序列第三位である刹那の命令は効力があつた。

子供とはいえ、腐つても王族。

血の繋がりと刹那の剣幕のお蔭でこれまで表立つて律那を傷つけ殺そうとする輩はいない。

でも裏で色々画策し、間接的に殺そうと行動しているのも知つていた。

子供過ぎて、小さな手では大切なもの一つ守れない。力が足りなかつた。

(・・・っ、くそっ！俺は律那を失いたくないのに)

刹那にとって行き難いこの世界は、刹那の事を嫌い嘲笑つているようを感じた。

いつだつてこの世界は双子である刹那と葎那を差別した。

「この世界に色は無い。刹那はこの世界に色を見つかられなかつた。

# Chapter 1 Prelude 02・零れ落ちゆく（後書き）

零れ落ちゆく色のカケラ  
一つとして落としたくは無いのに、何故

城下から少しばかり外れた所にある塔の中央近くにある一室  
息を殺して忍び込んだ刹那が居た。

(・・・これも。あつ、これもだ。)

こそこそと隠れながら献上品をあさるその姿はさながら怪しい盗人  
である。

当の本人である刹那にはこれっぽっちもそんなつもりは無く、むし  
ろ良い事をしているとばかりに得意げだ。

しかし、壊したり捨てたりしている為盗人とあまり変わりはしない  
のだが。

何を隠そう、律那に送られるであらう品の検品作業真っ最中である。

軽い呪いのかかった呪具は力を持つて壊してしまえばいい。  
複雑な呪いのかかった呪具は、その呪いの力を利用して返してやれ  
ばいい。

昔はすぐ呪いにかかり、体中切り傷擦り傷、熱や体調不良で倒れる  
事もあつたけれど最近ではそう簡単に引つかかる事はない。

(人と悪魔は成長する生き物である。・・・なあんて)

成長して欲しい呪いの送り主達は相変わらずの行動を続けているの  
だけれど。

手を休める事無く、呪具の選別を続ける。

(これは、大丈夫。・・・こつちは駄目。)

呪いです！と言わんばかりの宝石もあれば、日常品に化けた呪具も  
あつた。

上に立つ身である刹那は立場柄、呪いの臭いには敏感だ。

そういう教育もされてきたし、安全に生きていく為にも必要な事だ

つた。

ポイと背後にネクタイピンを放り投げた。

(こんな物あいつに送つてどうする。絶対使わないし。)

「てつーー！」

放り投げてすぐ、『丁寧にも背後から襲つてきた衝撃に、思わず叫び声が出る。

バツと振り返るとそこには絶賛呪い発動中のネクタイピンがあつた。

「・・・マジでか。」「

(全つ然氣付かなかつた。)

軽い呪具だつた為に軽傷で済んだが、この呪いがもう少し重かつたらと刹那は冷や汗をかく。

最近こいついた類の呪いが増えている。『気を抜くと、すぐこれだ。

悪魔たちは改心する所か嫌な方向に成長しそうだつた。

鎌鼬を繰り出しながら地面に転がつていたネクタイピンに慎重に近づくと思い切り踏みつけて壊した。

(上手く臭いを消しやがつて反則だぞー)

「あーあーあー。やつちやつた。・・・だあー！」「

髪の毛を思い切り搔き鳴らとその場に座り込んだ。もうため息しか出でこない。

洋服には汚れ一つ無く、肌に直接傷をつける辺り實に悪魔的である。痛みで怪我がヒリヒリするが、背中では治療するに治療できない。随分ぱっくりいったものだ。いくら体が丈夫だとは言え、痛いものは痛い。

(こういう時、使い魔が居れば楽なのに)

使い魔の儀式は決して簡単なものではない。召喚にも契約にも危険を伴うものだ。

この魔界広しと言えど、成功している者など一握りしか居ない。何より使い魔は人を選ぶ。

この危険な賭けをしようとする者は少ない。

だけど、自分に絶対的な忠義を誓つ有能なる僕が居れば今の生活から格段に向上すると思った。

こう言う時、姉が羨ましくなる。彼女は稀なる成功者の一人だった。一癖も二癖もある一人が、何だかんだで良い主従関係を築いていている事に憧れた。

いつも刹那の絶対敵わない上位に居る彼女は刹那が欲しいもの全て持っている気がした。

使い魔がいる事も、自分より年上な事も、魔王になる事は無いという事実も・・・

(「じうじ考えて仕方ない。」)

検品はもうすでに済んだ。ならば、もうこの場所には用は無い。

刹那は傍らに放つておいた新作の人形を手に取ると、もう一度先に起こることを思つて大きなため息をついた。

目指すは、塔の天辺。

送り主達は知らない。

呪いの全てを刹那が処理し、被害に遭うのは刹那だという事を。傷ついているのは、嫌う律那ではなく大切な刹那だという事に

( 薙は俺が絶対守るんだ・・・ )

時が全てを解決してくれるとは思わない。  
着実に一步一歩進む時間は決して待ってくれない。  
悔しかった。何より捕らわれる自分が。焦りが募り、時間より一步  
先を行つてみたかった。

Chapter 1 Prelude 03 · 赤色の想いと（後書き）

赤色の想いと、止まらない時間  
置いていかれたくない、心の底から想つた

俗世から切り離された塔に似つかわしく無い、ドタドタと荒々しい足音が聞こえる。

こんな風にやつてくる人は一人しか居ない。

自然と律那は口元が緩むのが分った。

早く早く早く・・・

急く気持ちに蓋をして、ゆっくり瞳を閉じ、大きく深呼吸を一回。今まで考えていた黒い感情を吐き出す。

この醜い気持ちを彼だけには知られたくは無かつた。

音が段々と大きく近づいてくる

騒々しい音。だけど微笑ましくて律那はこの瞬間が好きだった。

(カウント・・・三、二、一)

「・・・律!」

バンッ、と息を切らしながらも嬉しそうな笑顔で勢いよく扉を開け放つ刹那が居た。

(そうやっていつも君は律を掬い上げるね)

「いらっしゃい。せつちゃん」

律那は出来る精一杯の笑顔で答えた。

\* + \* + \* + \* +

他愛無い刹那の話を聞きながら葎那は紅茶を入れる。  
紅茶が大好きな刹那のために調べ、取り寄せ、練習を繰り返した。  
誰にも負けない美味しい紅茶を入れる自信があるのはここだけの話だ。

(今日はどんな顔を見せてくれるのかな)

一緒に居られない時間を埋めるように、外の世界を教えようとする  
ように

森の中で綺麗な花を見つけた事、大人に悪戯して一泡吹かせてやつ  
た事、今日のご飯に嫌いな物が立て続けに出て来た事・・・

刹那は沢山の事を饒舌に話した。

話の内容よりも身振り手振りを加えて時に大げさに楽しそうに話す  
刹那が愛おしかった。

話が一段楽したところで、刹那は新しく持つてきた人形を仲間に加  
えようと辺りを見渡した。

童話をモチーフに作られた人形は刹那のお気に入りである。現に彼  
の大好きな紅茶の名前をそれぞれに付けていた。

まだ全ての人形が出来ていて訳ではなく、刹那が来るたびに増えて  
いつている気がする。

綺麗に机の上に並べられているはずの人形の姿はなく、窓際に無造  
作に転がり落ちていた。

「この人形達はストレス発散の道具としておいてるんじゃ無いんだ  
ぞ。」

言うが早いか行動が先かその声に律那が振り向いたときには刹那は律儀にも床に散らばつた人形達を拾っていた。

本気で怒っている訳ではなく本当に困った奴だなという風だ。

いつもこの人形達を乱雑に扱うとプリプリと文句を言うのはお気に入りの人形だからだろうか

多様な姿の人形達は持ち主に似たのか、少しまぬけな表情をしたどこか愛嬌のある顔をしていた。

特に猫の人形のいっそ清々しく笑つている歪んだ口元など刹那につくりだ。

こんな風に刹那に世話を焼かれるのは嫌いじゃない。

律那が敢えてそういう行動をしているのを刹那は分つているのだろうか

律那がもう一度チラリと見れば回数を別けて拾えれば良いのに、何度か落としながら全ての人形を腕に抱えていた。

性格が出るのだろう。本当に不器用だ。

ふと、テーブルの上に綺麗に並べるその後姿に律那はちょっとした違和感を感じた。

常人には気付かないかもしれない僅かな違和感

そう、手元より少し遠くの場所に人形を置こうと前ががみになつた時のほんの少しの体の強張り

(・・・また、か)

いつだつて刹那を見てきた。片割れだからか、秀でた頭脳も手伝つてか、刹那の事は大抵分る。

いくら上手く心配をかけないよう誤魔化そうとした所で、律那が見破れないはずも無い

律那が刹那を騙せても、刹那は律那を騙せない

紅茶を入れていた手を止め乱暴に後ろから動けないよう肩を掴むと  
シャツを思い切り捲る

「ちょっと、おい！」

刹那の慌てた様な制止の声など聞かない。

「ねえ、せつちゃん。この切り傷、またなの。」「

これは疑問系ではない。断定だ。

刹那の背中にはたいして治療もして無いであろう真一文字に裂かれた痛々しい傷跡

傷口の触れるか触れないかの所で撫でながら意地悪く耳元で囁くように言う

後ろからの為、律那から刹那の顔はよく見えないが痛みと後ろめたさで歪んでいる事だろう。

逆に、意地悪そうな声とは裏腹酷く泣きそうな顔をしている律那を刹那は知らない。

「今回何？」

「…………いや、転ただだけ…………！」

バレバしなのにも関わらず、嘘をつく刹那の肩を思い切り強く掴んだ後手を離した。

失礼なくらいに勢いよく刹那は律那から遠ざかつて距離をとると、律那に目を合わせないよう視線を逸らした。

しどろもどろに口から出る言葉は小さすぎてよく聞こえない。

そんな責めた顔で否定されても説得力は無い。それに

「馬鹿なの？せつちゃん。どう頑張ったら転んでこんな怪我ができるの。」

律那は最近使うことの多くなつた救急箱を取り出すと、輝かんばかりの笑顔を刹那に向ける。

（・・・今回も思いつきり痛くしてやるわ）

刹那が使う分、救急箱の中身は大繁盛で、お陰様で治療のスキルも格段に向上した。

今ではわざと染みの治療をするのもお手の物だ。

(これに懲りて、危ない真似なんてしなければ良いのに)

「・・・呪い・・・返しに・・・失敗・・・・・・・・・・・しま

した

ため息と共に渋々と刹那の口から零れ落ちた言葉は、毎度刹那の予想を裏切る事がない。

律那に送られるあの大量の、惡意の籠つた呪いの数々。

刹那はそれを事前に盗み出しでは、一人で処理をしているのだ。

自ら被つたり、呪い返しに失敗したり・・・

いつも何処かしらで失敗して怪我を作つてくる。

もう少しがれくらいの傷を見たのか分らない。

刹那は不器用だから、自分で治療出来る範囲は限られている。

だ。

治つてしまつた傷を見つける事は葎那には出来ない。いくら体が丈夫だとはいえ、無理はしないで欲しい。

「……そらばの嫌が田舎で忍辱するの」

小さく零れたその言葉は刹那までは届かなかつた。

言つたところで刹那は聞かない。

どんなに酷い言い方をしたって頑固で絶対に曲げやしない。

律那は呪いを送られてきたって全て処理しきる自信があつた。

ちやつかり威力を倍増させて返す自信だつてあつた。

（なになのに、なに・・・）

事前に全部持つていつてしまふ。律那を心配して一人で解決しようとする。

気付かない。彼はいつだって気付きやしない  
自由の無い生活より、自身が殺されそうになる事より、それが律那  
にとって一番の苦痛だという事に

（・・・いい加減早く気付いてよ刹那）

Chapter 1 Prelude 04・金色の願いと（後書き）

金色の願いと、捕らわれの言葉  
言えない、言えない、いつだって言葉に出来ない

巨大な城の長い廊下を足音を立てずに静かに歩く青年がいた  
視界に入れているだけならば空氣に溶けてしまいそうなくらい存在  
感が乏しいのにも関わらず、彼だと認識した瞬間パッと現れるその  
華のような存在感

辺りを見渡しながら歩いているのはきっと自分を探しているのだろうと直感する。

捕まつたら厄介だ。こちらが先に気付いていて、そして相手に気付  
かれていらない分幸運だろ？

少し離れた廊下の角に隠れながら観察していた刹那は思つ。

(捕まつたら、ヤバイ。)

嫌な汗をかくのを感じながら、刹那は息を殺して後ずさる。

青年の歩く先とは反対方向に踵を返したその瞬間。

「・・・つぐえ！」

急に首根っこを掴まれ浮遊感と共に宙に浮く体。

刹那は首の圧迫感に顔を歪めながらも見上げた先には、素晴らしい  
くらいに素敵な笑顔をした姉の使い魔の姿があつた。

あんなに離れていたのに、どんな離れ業だ。そしていつの間に気が  
付いた

そんな事が刹那の頭を過ぎたが、しかし一瞬で捕まつた事よりも  
その笑顔に恐怖した。

「じいやー！」

「じいやじゃ無いです。執事です刹那君。

そんな事より、マスターのお呼びですので同行お願ひします。

嫌な顔を一つせずスッパリ訂正する執事と名乗る青年。執事と言つのは役職名ではなく彼の名だ。

長く生きてはいるのだろうが、まだまだ若い。外見年齢は三十路と言つた所だろうか。決して爺と呼ばれる姿はしていない。

“じいや”はただの愛称だ。本人は嫌がつてゐるが、定着してしまつた為に変える気は無い。

「い・や・だ！」

（姉様が用？・・・駄目だ嫌な予感しかしない）

刹那はジタバタと暴れてみるが、大人と子供の体格差、捕まれた腕は離れる事無くビクともしなかった。

悪足掻きは持ち上げられた猫状態を抜け出せる訳もなく、首が苦しくなるだけだった。

「いやはや、全く。困つた人ですね。暴れて、僕の手を煩わせないで欲しいです。」

言つている台詞と声色は困つてゐるのだが、顔は全く困つてなど居ない。

むしろキラキラした笑顔は心なしか嬉しそうだ。

「ちょつ、待て！」

執事は見事な早業で手際よく何処からか取り出したロープで刹那を縛り上げると有無を言わさず俵担ぎをして颯爽とその場から連れ去るのであつた。

「このサド野郎――――！」

「良い叫び声です。」

刹那の叫び声だけが静かだつた廊下に響き渡つた。

\* + \* + \* + \*

先ほどと同じように、静かに足音を立てずに執事は早足に進んでいく。

それは刹那を抱えていたとしても変わらない。ピンと背筋を伸ばして歩いていた。

諦めたのか、刹那は大人しく流れに任せてに脱力している。そして執事は華美な装飾がされた扉を迷う事無く、刹那を抱えあげている手とは逆の空いている手で思い切りよく開けた。

「連れて来ましたよマスター！」

ノックも無しに行き成り入ってきた執事と刹那を怒るでもなく招き入れると

ぐるぐる巻きに縛られて俵担ぎにされている刹那の姿を見た女性は優雅に猫のように微笑んだ。

城の中でも珍しい寒色で纏められた部屋は上の階と吹き抜けになっている開放感がある。

大きな窓に背を向ける形で位置する豪華な椅子に執事のマスターである彼女、杏那は腰掛けていた。

「む？ご苦労だつたね。じいや」

「じいやじゃ無いです。執事です。

執事という名も不服ですがじいやよりは良いです。好い加減執事にしなさい。マスター。」

杏那はいつもながら律儀に訂正するの執事の言葉を右から左。綺麗にスルーだ。

執事は近くにあつたソファーに刹那を放り投げると自身も傍らに腰掛けた。

勿論縄を解くことなどはない。

「姉様！こんな無理矢理連れて来て俺に何の用なんだ？」

不満を隠そとせずに顔に出しながら、芋虫状態の刹那は問う。

「別にアタシは無理矢理なんて頼んで無いけどねえ。まあそれは良いとして、刹。

お前また怪我したつて言つじやない。それ、どうにかならないのかい？」

「・・・姉様は分かつてゐるだろ。」

この話題は嫌だというように、顔を逸らしそっぽを向く刹那

「まあ、可愛い我が弟の事はこの魔界の中じゃ一番分かつてゐるつもりだけね。

葎が大切だから心配するのは分かるが、アタシにとつてはお前も大切で心配なんだよ。」

椅子から立ち上がりソファーに近づくと杏那は刹那の頭を優しく撫でてやつた。

氣恥ずかしさからか、刹那は顔をあげようとしない。

「それも・・・分かつてゐる。」

(分かつてゐるけど・・・中々難しい)

この魔界の中で刹那の気持ちを分かつてくれるるのは杏那だけだろう。勿論一番仲が良いのは葎那であるが、葎那の為にと彼に隠している部分を知るのは杏那だけだった。

葎那が大切だと言い切つても、母とは違い変わらぬ笑顔で微笑んでくれた彼女が姉であつた事を本当に嬉しく思う。

刹那の行いを心配はするものの咎める事はせず、尚且つ助力してくれるのがありがたかった。

彼女が葎那の為にお偉い様達に口添えしてくれているのを知つている。

そんな優しい姉が刹那は好きだった。

「お前が傷ついたら傷ついただけ、律もアタシも心配するし悲しくなるんだ。

特に律は、自分の所為だと苦しんでしまつよ。」

「うん。」

「アタシはお前みたいに行動出来ない。見守る事しかできないし、口添えするしかできない。

だけどね、お前に無理はして欲しくないんだ。」

「大丈夫。無理じやない。俺一人でも守つてみせるから。」

「お前の意思は強いから、止める事はしないけど・・・

ちゃんと慎重に考えて行動する事！無茶は絶対しない事！自分の事をあまり犠牲にしないこと！

この事をしつかり心に刻んでおいて。分かったかい？

「つ、分かった。」

「刹はちゃんと実力もあるんだから、見極めて行動すれば大丈夫さ。どうしても駄目なら、アタシやじいやに頼ってくれれば良いから。」

「じいやじゃ無いんですけど、僕も微力ながら力をお貸します。」

いつの間にか執事も加わって頭をボサボサにするほど撫でられる。その手は温かくてどこかくすぐったかった。

「・・・サンキュー。」

杏那は絡みついた縄を解いて立たせると、その小さな体を抱きしめた。

この温もりを、心の温かさを律那にも知つて欲しいと刹那は思つた。



水色の海ごと、優しいまなざしの先に  
せめて、可愛い弟の前でだけは良い姉である事を努めよう。

「・・・麗しそ、姉弟愛といつやつですか。」

先ほどまで居た来訪者が帰り、主従だけになつた静かな部屋で含みのある笑顔で執事は言う。  
少しばかり雑談や相談をした後、刹那は元気よく帰つて行つた。

「ふん。分かつてゐる癖に」

杏那は黒い艶のある長い髪を翻らせて玉座に戻ると、頬杖を付きながら楽しそうな執事を見る。

全てを知りながらマスターである自分に意地悪い事を平氣で言つ。性格の悪い奴だ。使い魔としての立場を理解しているのか疑わしい。

「刹那君を心配し、葎那君を案じ・・・  
弟思いの良い姉じやないですか。ねえ。それが本心ならば、です  
けど。」

「勿論、本心に決まつてゐるだろ? アタシはいつだつて刹を心配し、葎を案じてゐる。」

「これは嘘偽り無い本心だよ。」

「ああ、失礼。本心ならば・・・ではなく、裏に含みがなければで  
すね。」

(・・・お前の方が裏に沢山含ませてゐるだろ?)

多くを語らず、本心も嘘も変わらぬ顔で吐き出す執事は色々な意味で得体が知れない

普通の捻りよりも性質の悪いくらいに複雑に捻くれてゐる執事はい

つも何がしたいのか分かり辛い所がある。

難儀な使い魔を召喚したものだと過去を悔やむが、もう執事とも長い付き合いだ。

全ては分からずとも、慣れの所為か大体は把握できるから良しとしている。

その性格にうんざりする時もあるがヘコヘコと従う出なく、自分に対し強気な態度を取れる執事を杏那は気に入っている。

そして、捻くれ者同士案外良いコンビなのではないかと思っている事もまた事実だ。

「純情なる少年を騙して、貴女は酷い人ですね。だけど、そんな貴女が僕は嫌いじゃない。」

杏那が律那を庇うのには訳がある。

律那が邪魔ならば、殺してしまえば良い。自分でやらずとも他の悪魔をけしかけてやれば良い。

そんな事は至つて簡単だ。

しかし、律那が死んだ場合問題なのは刹那の行動だった。

片割れの大切に思っている律那が死んだ時、悪魔の癖して優しい心を持つ刹那は魔界を悪魔を憎み出て行ってしまうであろう。もしくは、律那を庇い刹那が死ぬという事も絶対に避けたい。それは非常に杏那に対しては面倒な事だった。

別に、弟が死のうが出奔しようが自分は悲しまないと思つ。むしろ、何も思わない事が普通だ。非道と言われようともこれが悪魔の性である。

なのに何故、気にかけ心配するのか。それは、杏那は絶対に魔王になりたくないからである。

王族と言つ名に縛られている今、これ以上何かに縛られたくない

た。

魔界では王族が魔王になる世襲制だ。それにプラスして妙なしきたりがある。

男女交互に魔王に就任しなければならない事だ。  
平等を謳っているのかもしけないが、迷惑な話だ。

しかし、現在の魔王が母であり女性なのは杏那にとつては幸運な事  
だった。

母の次に魔王になるのは第一王子である刹那だ。

例え、杏那が先に生まれたとしても第一皇女である以上次期魔王候  
補は刹那なのだ。

しかしもし、その刹那に何か不慮の出来事が起こってしまったら、  
次の魔王候補は禁忌である第三王子の葎那か、女である第一皇女の  
杏那か・・・

魔界のお偉い様は杏那を選ぶだろう。そんなことなど想像にたやすい。  
しきたりを一度曲げても禁忌がなるよつかまし、とそう考えるに  
決まっている。

そんな事態にならない為にも、刹那には魔王を継いでもらわなくて  
はならない。

その為の手っ取り早い方法が葎那を庇つてできる限り守つてやり、  
刹那への危険を極力減らしつつ刹那に身を大切にしろと忠告する事  
なのだ。

表立つて行動出来ないのは、下手に動いて魔界に睨まれては生き難  
いから。ただ、それだけ。

魔界から逃げ切る事も造作も無いことだが、王族としての暮らしに  
慣れてしまった今、態々新しい生活を始めるのはとても面倒くさい。

「葎の事はどうでも良いけど、刹に死なれたら困るのはアタシだ。

それに、お前も忙しくなる。面倒事は嫌いだらうへ。

「それはごめん被りますね。

マスターが魔王になつたら是非僕との契約を破棄しましょ。」  
クスクスと本気か冗談か分からぬすれすれの言葉を楽しそうにサ  
ラリと笑顔で零す。

「だ・か・らーそつならぬ為にも、くれぐれもちやんと見ていて  
おくれよ。じこや。」

「じいやじや無いですけど、見ていてあげますよ。適度に。」  
おちょくつている様に感じられるが、その言葉に嘘は無いだらう。  
一応命令でもあるのだから

勿論関わる範囲内で、言葉通り適度に、だらうが。

「それにしても律那君は刹那君の役に立つ駒として生かされている。  
しかし、実際はマスターの役に立つ駒として生かされているんで  
すから。

「その事実に気が付かない魔界の悪魔達は本当に馴鹿ですよね。」  
「役に立つてもらうや、アタシが魔王にならない為に律には生きて  
もらひ。」

(そう思わなければ、アタシはアイツ等を愛せない)  
例え、歪んでいようともこれも一種の愛情になるのだろうか。

悪魔を、他の者を愛せる事ができる刹那は異例な事でやはり異端な  
のだ。

律那だつて片割れだからといつ特殊な例で刹那を大切に思ひ愛はあ  
るもの、他のものに対する愛は・・・

杏那への愛など無いのだろう。杏那から律那への愛が無いよつ。  
(頭の良い律の事だ。全て分かつてゐに決まつてゐ。)

それでも、何も言わぬのは理由はあれど、刹那を傷つけなつよう  
行動している所為か。

他の悪魔達よりは幾分も随分ましに思つてくれてゐるのであつた。  
久しく会つ事の無いもう一人の弟に思いを馳せた。

「もし、アタシが魔王になるなんてそんな最悪な事態に陥つたのなら全力で逃げるから。

その時は、お前も道連れだよ。執事。」

「お心のままに、マイマスター。

ですが、迷惑料として僕の名を変えてくださいね。」

「考えておくよ・・・名を。」

確証は無いし、やうならなによつに行動するはずなのに、最悪であるはずの先になるとそんな気がした。

だけど、二人でならば面倒くさいが面白い逃走劇になるのだつた。  
同じ事を思ったのか、お互い顔を見合わせ面白ひき声をあげて笑  
つた。

だけれど、お前と話す時はやはり腹心地が良いく感じなんだよ  
愛しいことこの上ない感情は嘘の様に瞬く

大人たちに不満をぶつけ、仕方ないから勉強も少しする。  
あまり城に居たくないからコッソリ別宅を作つて充実させたり、姉  
と執事に話を聞いてもらつたり、律那の所に遊びに行く。

何ヶ月も何年も同じことの繰り返し。  
だけど、この日常が刹那にとつては本当に大切で愛おしいものだつ  
た。

「なあ、律那。」

「…なあに？せつちゃん」

紅茶を飲む手を止めて律那は小さく微笑む。

「俺…」

「うん。」

律那は聞き上手だ。それは刹那に対してに限つた事かもしれないが、  
言葉に詰まつても急かす事無く待つしてくれる。  
どんなにくだらない内容の話でも、呆れたり茶化した言葉は言づけ  
れどきちんと最後まで聞いてくれる。

自分よりも数倍頭が良くて、勉強で分からぬ事があつても全部分  
かりやすく教えてくれる。

馬鹿にしたような台詞は言うけれど、卑下ではなく軽いからかい半  
分で言つてるのが分かる。

「俺つて幸せ者だな。」

「はあ！？」

・・・何、せっちゃん急にどうしたの？熱もあるの？」

何言つてると呆れ顔の律那を前に満面の笑みを浮かべる刹那  
確かに、この世界は嫌いだ。刹那にとつても律那にとつても生き難  
い。

交友関係も刹那に杏那に執事。たつた三人だけしか居ない狭い世界  
だ。

「んー、何となくそう思つただけ。」

だけど、刹那は満足していた。自分は凄く“幸せ者”なんだなと感  
じた。

そんな刹那をジト目で見つめる律那。彼には全く理解が出来ないら  
しい。

(やっぱ、律には分かんないか。)

「幸せ者つて何さ。」

「だつて、俺今幸せだし。楽しいし。」

「馬鹿だねえ。せっちゃん。」

普通、悪魔は幸せ者つて言わないよ。むしろ、卑怯者つて言われ  
て喜ぶのが普通だから。」

「良いんだよ。俺は、俺だから！」

「まあ、せっちゃんが良いなら律は良いけどね。」

そこまで面白くない事を一人して声をあげてカラカラ笑う。  
くだらないやり取りを、取り留めの無い事を話して笑う。

(・・・そういうれば忘れる所だった。)

刹那は急に立ち上ると持つてきていったリュックからいそいそと田  
物を取り出す。

「？」

「ほら、今日から完全復帰だ。」

「ずすい」と取り出した物を身を乗り出して葎那の顔に近づける。  
近すぎて見えなかつたのか、一度刹那の手から容赦なく叩き落すと  
惨めにも床に転がつたそれを拾い上げた。

「ああ、アールグレイ。」

葎那に足を捕まれてひっくり返つてはアールグレイと名付  
けられた帽子屋の人形だ。

勿論帽子屋なためチャームポイントと言えば大きなシルクハットな  
のだが、葎那に言わせると刹那と同じ紅い目のボタンがチャームポ  
イントらしい。

葎那はシラつとした顔でアールグレイを机の上に乗せると頬杖を付  
いて突いた。

「何故、急にこの人形かと言うと、実は先日・・・  
塔の下にて哀れにも泥まみれで所々破れたアールグレイが発見され  
たのである。」

「投身自殺から奇跡の生還をしたんだね。にしても、見違えるよう  
に綺麗になつたねえ・・・」

「馬鹿！お前が突き落とした犯人だ！！」

可哀相な状態のアールグレイの第一発見者である刹那の驚きは相当  
のものだつたのだ。

その後の全ての予定を変更して刹那が救助に走つたのは言つまでも  
無いだろう。

「あんなにボロボロでもつ助からないかと思つたんだぞ！ちゃんと  
白状しろ！」

投身自殺をしたと葎那は言つが、どう考へてもそれは葎那による他  
殺だう。

何せ、アールグレイは動けない。

「はいはい。ぬいぐるみ一つで大げさだよ。・・・りっちゃんはどんな凶悪犯なの。」

「りーつー」

「はいはい。りっちゃんがやりました。手が滑って落としちゃったの。」

「・・・まあ、わざとじゃないなら許すけど。」

落としてしまったら、塔の下まで行けない律那にはどうにもする事が出来ない。

(しようがない・・・のか。)

がくりと刹那は肩を落とすと、お遊び半分だった尋問は実に呆気ない幕引きで終了した。

「あつ！それとー」

すぐさま気を取り直すと、刹那はもう一つリュックから取り出すと先ほどと同じようにずずっと律那の前に突き出した。そして今度は叩き落される前に刹那はアールグレイの隣にそれを座らせた。

「じゃん！！アールグレイが気に入らなかつたのかと思って、見ろ今度は女の子だ！」

「あのねえ・・・」

得意げに紹介する刹那と呆れ目の律那の視線の先には同じく大きなシルクハットを被ったアールグレイの女の子バージョンがいた。別に律那はアールグレイが気に入らなくて落としたわけでは無いのだが、刹那はどうやら男の子の人形が気に入らなかつたと判断したらしい。

「・・・だからワザとじゃないって。てか、帽子屋が一人居てどうすんの。」

「わかんないけど、良いじょんか。可愛いし、女の子少ないし。名

前はもう決めた。レディグレイだ！

「ふーん。まあ妹的な何かつて事にしどけば？」

「そうだな。それがいい！」

穏やかに一人の時は流れていた。

今日は刹那が呪い返しに失敗しなかつたからだろうか。それとも刹那の機嫌が良いからだろうか。

大きく開け放つた窓から少し涼しくくらいの風が入ってくる。暖かい気候というものが無く、寒さだけがある魔界では今が一番過ごしやすい季節だ。

これ以上寒くなると厚着をするために動きにくくなる。

刹那自身は寒いのは平気な方だが、それでも着込む。寒がりな杏那など雪だるまのように真ん丸になるくらいだ。

刹那は背後から来る風に顔を顰める。少し、風が強いようだ。窓が開きすぎに感じる。実際、窓際に置いてあつた物が散らばっていた。

（おいおい。良いのか？）

刹那は立ち上がり、窓際に立つ。

肌を直接撫でる風は先ほどよりもとても冷たく感じた。少しだけ開けるように残し窓を閉めた。

振り返るとその場を動かず再度紅茶を飲む、先ほどよりも表情を失くした律那の姿が刹那の目に入った。

願わくは、願わくは、希わくは・・・

いのまえ、時よ止まつてしまえ

時よ止まつてしまえなんて、そんな戯言。  
本当は分かっていたんだ。これが、幻である事なんて。

悪魔とは別の生き物だからか、体のつくりが違うからか。

悪魔の自己主張の強い存在感の所為で、彼は素にしているのにも関わらず存在は空氣のようだつた。

フードを深く被り何処からどう見ても怪しい変な人物なのに誰一人として彼にに気付く事が無い。

良い事なのか、悪い事なのか。

この魔界でなら執事はその辺の石ころにでもなれる気がした。口を開かなければ、彼だと気付かれなければ・・・の話だが。

「一体、僕は何をやつているんだか・・・」

遠田で刹那を追いながら執事は一人ごちた

“時”とは無情に過ぎ行くものだ。

そう、いつも思つていた。

止まつてしまえばいい、と思つた事は無い。

だが、永遠を手にしてみたかった。とでも言えれば、聞こえは良いのだろうか。

ただ、自分が持つていらない見た事の無い“未知”を手に入れてみたくなつた。

人とは違う何かをして、人とは違う何かになりたかった。

今思えば、あの時の自分は何かの衝動に駆られるように行動していた。

何だつてした。回りの事を傷つける事しかしなかつた。

傍に居た“彼女”はいつだつて泣いていた。哀しそうに瞳が揺れていた。

それでも、止められなかつた。

実際、手に入れてみればどうだ

あんなにも希つていた他の世界は、最初すら楽しいと思つていたもの今ではもう価値が見出せなくなつてしまつた。

“未知”は“既知”になつた

永遠を手に入れて、それだけだつた。

違うモノを求めて人ではなくなつた。それだけだつた。

ただ、それだけだつた。

自分自身が変わつても、“時”は相変わらず無情に過ぎて行つた。

だから、彼が羨ましかつたのかもしれない。  
自分を見失わずに歩ける刹那がどうじょうもなく眩しかつた。

だけど、理解などできなかつた。

一心に守りたいと願い、行動できる刹那が

(僕が、あの時彼女を利用するのではなく守るよう行動していたならば・・・  
何かが変わつたんですか?)

禁忌と呼ばれた律那の金色の目が彼女のそれと被る

もう、すでに過去の事だ。

後悔などしない。そういう行動を進んでとつてきたのは自分だからもし、例え過去に戻る事が出来たとしても執事はまた同じ行動をす

るだろう。

想像でも剎那と自分を重ねる事は出来なかつた

(分からぬ)

また剎那が呪具に苦戦している様が遠目に伺える  
剎那は気付いていないけれど、執事の位置からは丸見えた。  
諦める事無く真剣に、律那を守ろうとする剎那。  
もつと、氣楽に生きれば良いのにいつだつて彼は手を抜かないで真  
っ直ぐだ。

「口口口」と表情を変えて、処理しきつた事に安堵し、達成感に満ち  
た嬉しそうな笑顔を浮かべる  
(今日の所は、怪我は無し・・・ですか。)

何故、他人の為にそこまで出来るのか分からぬ。  
馬鹿馬鹿しいと思つ。

だけど、その傍らで、何故か悲鳴が聞こえる。目を離せない自分が  
居た。

主人の命だからだけでない。自分から気にかけているという感情に  
戸惑つ。

何故、心が悲鳴をあげるのかが分からぬ。これが、良心と言つう  
のなのか

自分は、何を思つてゐるのだろうか。

(・・・僕は、僕が分からぬ)

苦痛に満ちる顔を見るのが楽しいと思つ。恐怖に歪む顔を見るのが  
好きだと思う。

自信の利害の為に動き、騙しあいや駆け引きも好きだと思う。

それ以外の感情を執事は知らない。いや、分からぬ。理解が難し

い。

(悪魔に感化されたか)

人から足を踏み外してからと言つもの、人間らしい感情と言つ物を置き忘れてしまつた。

今や、人よりの感情を持つ刹那より悪魔達の方が執事に近い気がした。

(分からないです。昔は理解していたはずの感情が)

葎那の金の目を見て、思いだす“彼女”

杏那の長い黒い髪を見て、その後姿を重ねた事もあつた  
だけど、恋していた訳じやない。愛していたわけじやない  
もつと違う何かがあつた。“彼女”に対しては言葉に出来ない特別  
な何かがあつた。

“彼女”に対する気持ちも、杏那に対する思いも、葎那に感じる痛みも  
刹那に感じる苦味も

みんな違つた。だけど、それを明確に執事は理解できない。

「ねえ、六花・・・

君なら、この気持ちの意味を教えてくれたでしょつか・・・

穢れ無き雪の名を贈つた彼女に、聞いてみたかつた。

(もう一度、君に会えたならこの心の引っかかりが解けるでしょ  
うか)

方法や力は違えど、同じく人から人で無い存在になつてしまつた彼女ともう一度だけ会いたいと願つた。

もう一度、彼女の声でもう呼ばれなくなつて久しい名を呼んで欲し  
いと願つた。

律那を失いたくないと思つてしまつのは、金の瞳を六花と重ね合わ  
せてしまつからだらうか。

彼女への罪悪感がそうさせるのか、彼女への執着心がそうさせるのか  
この気持ちを、心を理解したいと無意識にも思つてしまつのは  
本当は人と言う存在に戻りたいのかもしれないと、執事は心のどこ  
かで他人事のように思つた。

## Chapter 2 Call me 08・白い雪の華に（後書き）

穢れ無き白い雪の華に

問いたい、聞きたい、会いたい、触れたい・・・名を呼んで欲しい

最近、体が酷く重い

(呪い?いや、でも……)

呪いの臭いには人一倍敏感だと葎那は自負している。  
それに、気をつけているつもりだ。

塔の一室にはそれらしいものは見当たらないし呪いの臭いはしない。  
念のために行ける範囲で下に下りて探してみたが見当たらない。  
刹那が持つてくる物も刹那がすべてチェック済みで、その上で念の  
ため葎那も確認している。

だから、葎那の部屋に呪具が入り込むことはそう簡単な事ではない。

(ならば、この違和感は何?)

体に不調を感じる理由は思いつかないし、身に覚えが無い。  
しかし何かと息苦しく感じるし、起き上がるのに苦労する。何より  
一つ一つの動作が動きにくい

葎那は一気に年老いた気分だった。

最初は氣のせいだと思った。ほんの僅かな違和感。

しかし、日を月を重ねるに毎に着実に段々酷くなつていった。  
これを未だに氣のせいだと言うにはあまりにも可笑しそぎた。

(だけど一体、どうやつて……)

頭をフル回転させてみるものの、葎那には皆日検討が付かなかつた。  
最初に違和感を覚えた日。思い返してみてもその日前後から何か変  
わつたことは無い。

特に葎那が欲しいと願つたものは無いし、増えたのは刹那のお気に

入りの人形が数体だ。

献上品にしたつて、結局氣に入るものなんて一つも無いから殆ど捨てた。

稀に見る良い品だったから髪飾りなど数点手元に置いてはいるが、呪いはかかっていない。

見る目には自信がある。だからこれは絶対だと言い切れる。

例え、この症状が呪いではないとしても何の解決にもならない。  
逆に余計問題だった。

これが病だとするのなら、この魔界に居る限り治る事は無い。  
治そうと医者に見せた所で、そのまま重い病で治せなかつたと逆に  
殺されるのだろう。

それならば、最後まで苦しみに負けず生き抜いてみせる。

まあ、体が他者より丈夫だと思っている分、病の可能性は限りなく  
低いが。

いくら禁忌とはいえそれは瞳の色の話。

片割れである刹那も姉である杏那も体は丈夫であるし、律那も昔か  
らそうだった。

自然に病にかかる事は、無いだろうと思えた。

(やっぱり、呪いかな?)

しかし、呪いの元が分からなければ対処のしようが無い。

馬鹿な悪魔達に殺されるのは癪だけれど、刹那が傷つかず自分だけ  
ならば問題は無いと律那は思う。

これ以上、刹那が傷つく所など見ていたくなかった。

刹那を一人残して逝く事になつたとしても、嫌だつた。

(それに、杏姉が居るからせつちゃんが独りになる事も無いし)

魔王になりたくないと思っている姉は、決して刹那を見捨てる事は

無いだろ？。

例えそれが利用しているだけでも、杏那自身の為に行つてゐる事だと律那は知つていたけれど、いつだつて影で刹那就助けていた。経過など思惑などどうでもいい。結果的に刹那就守られるのであれば。

今回もまた上手く助けてあげてくれるに違いない。

刹那就も魔王になりたくないと思つてゐるのは知つてゐるがそれは刹那就の問題だ。

杏那就が居れば幼少期は乗り切れる。その後、成長した刹那就がどう行動したつて構わない。

魔王になつたつて、逃げ出したつて律那と言つ重荷を背負つ事無く生きていてくれるなら。

律那という存在に傷つけられずに生きてくれるなら、それで良い。刹那就は自ら命を絶つ事はしない。律那の後を追つよつな真似はしない。絶対に

真つ直ぐ生きて、そして何よりも人の心を大切にする人だ。

律那が一言“生きて”と言えば、杏那就が一言“死ぬな”と言えば、刹那就は死ねない

それ以前を向いて歩ける人だから、きっと乗り越えてくれる。そして、忘れる事無く律那を思つてくれるに違いない。

(・・・だつて、律那も悪魔だし)

自分の気持ちに正直で自分が一番だ。

何と言われようが、自分の願いが一番大切だ。

刹那就の性格をよく知つてゐる分、先の心配は要らないように思えた。

何日もの間、刹那就を観察しても特に違和感は無く元気そのものだつ

た。

刹那が律那のようになると演技が出来るとは思えない為、呪いの影響は無かった。

なうばやはつ、このままで

後何日、騙し続けられるだろうか。後何回、刹那に会えるだろうか。

(後どれだけ、律の体はもつんだろう・・・)

刹那の前で演技し続ける事は難しくなつてきていた。

悟らせまいと強がつてみるものの、限界は近いのだろう。  
だけどこんなにも長い間よく騙せたものだと、逆に誇つてもいい位  
だろう。

同じ事の繰り返しだった。

けれど、悪くは無かつたその日常が崩れ始める音がした。

「いめん、いめんね。無力で・・・ごめんね。」

Alea jacta est. 『賽は投げられた』  
だから構わずに、終焉を望んでしまったんだよ

寒色に彩られた寒々しい印象を受ける部屋

大きく作られた白い花だけが飾られているバルコニーに杏那と執事は居た。

珍しく二人揃つて建物がひしめきあう城下の先、とても高い塔を見据えていた。

「律那君が・・・呪いにかかるているみたいですね。」

「そうか。」

「刹那君は気づいて無いみたいですが、・・・大分酷い状態ですね。余程強い呪いのようです。」

・・・あ、刹那君は至つて元気です。」

「そろそろ、起こるかと思つていたが・・・やはり「ええ、起こりそうです。僕も今まで全然気付かせんでしたけど・・・」

あの状態を見るに、もう限界が近そうですね。」

声色を変える事無く口を細めて笑いながら執事は言つ。いつもの軽口を言うのと同じノリで報告する執事の態度に呆れたものだと杏那は思うがいつも事だ。

(・・・律那には少し執着しているように思つたんだが、な。)

チラリと横目で見る執事は同じ調子で今の弟達の状況の報告を続ける。

杏那は余程の事が無い限り律那の居る塔に近づけない。

城に居る時の刹那状況は杏那にも把握できているが、律那関係はそもそもいかない。

弟達の状況を知るには執事に聞くしかなかつた。

少しの間言葉を交わす二人の話口調や態度は軽いものの、一人にとっては実に嫌な状況だつた。

杏那は手すりにもたれかかつて大きなため息をつく。

そう、仮初の平穏が崩れるときが来た。  
今までが、可笑しいくらいだつたのだ。長い間、平穏な日々が続きすぎた。

このまま続いてくれれば三姉弟には良い事だつたのだろうけれど、魔界で穏やかな平穏を求める方が無理な話だ。

しかしその平穏を極力伸ばす事に尽力したのは律那なのだろう。  
いつから気付いていたのかは知らないが、本人である上に律那は聰い子だ。

随分前から知つていて、原因を探し一人で抱え込み、隠し通す事に決めたんだろう。

杏那は良くもまあ、隠し通したものだと我が弟ながらに感心した。  
(律のことだからな・・・)

見えない所で足搔いて、探して考えて・・・その結果、どうにもならなかつたのだろう。

そして、どうにもならないと諦めた。

刹那の事は考えているにしても、自分自身の事は見捨てているに違いない。

「で？肝心の呪具は？」

「ちびっ子ながらに、呪いに敏感な王族一人が見つけられない呪いです。

・・・僕には荷が重いと思いません？」

「お前な・・・」

自分は悪くないとでも言つような態度で非を認めないのにまたも呆れる。

刹那・葎那に見つけられないのなら仕方ない氣もするが、流石にそれは無いだろう。

「年の功で何とかならんのか。

それ以前にお前は力を全て見せてるようには思えないからな。」

「マスターは呪いに関してはからきし黙田ですもんねえ・・・」

「そうですね。マスターには手も足も出ない苦手分野だから僕に頼るしかないんですね。

といつた副音声が聞こえた気がして一ヤ一ヤしながら小突いてくる執事に杏那は腹が立つて思いつきりぶん殴つてやつた。

「あいたつ！」

「ふん。呪いをかける事に関するアタシはプロフェッショナルだ。」

「いや、それ今の状況では全然胸をはれる事じゃないです。」

話を逸らすなど言わんばかりに杏那はギンッと執事をにらみつけた。それに対し、やれやれと首をくぐめて執事は答える  
「はいはい。これでも、強い力を持つ一族の中で長年鍛えられてきたんです。

そこら辺の使い魔や一般悪魔なんかに僕も負ける気はしません。  
・・・が、流石に王族様よりは力が劣りますよ。

特に力の強い刹那君が気付かない呪具を僕が見つけられるとも思えません。」

杏那は真偽を確かめるべく執事の顔を見詰めてみるが、嘘をついているようには見えなかつた。

執事の事だ、実の所しつかり探りは入れた上で見つけられなかつた

のだろう。

ならば不得手である杏那には到底呪具を見つけるなど出来やしない。よつは、お手上げ状態だ。

(様子を見ているしか、今まで通り見守るしか出来ないのか……)

「じゃあ、アタシらには何も出来る事が無いんだな。」

「いえ、夜逃げの準備は出来るかと」

間髪居れずにピシャリと言こきるデリカシーのデの字も無い執事の発言に驚きで止まつてしまつも、それは一瞬で。しんみりムードが全く続かない奴だと思いながらも、わざとそうしている事に杏那はつすうす気付いている。

本当に不器用な奴だと思いつつも、その心内を気付かれないとほんの少しの間を空けていつもの調子で杏那は答える。

「執事……お前は……

いや、何も言つまい。最悪の事態の為に夜逃げの準備は出来てるんだ。」

「流石マスター抜かりない」

クスクスと笑いながらそう軽口を叩いた執事も夜逃げの準備などとうに出来ていいであろう事が伺えた。

その表情に杏那は苛つと来るが、同じ事をしている杏那も人の事は言えない。

「・・・ゴホン。

と・に・か・く・様子見だ、様子見。

例え律が呪いに負けたとて、アタシらに重要なのは刹の行動だからね。

出来る限りは守つてやるのが楽だけど。その後、どうこう行動をとるかいくつか予想は出来るが、どれになるかまでは状況によるから。

「良い方向に・・・ついでに面白く転がつてくれればいいんですけど

どね。  
「

そう言って執事は塔の方に顔を向けて了。横目から見た執事は遠い目をしていて、塔を見ているわけでは無さそうではあったが杏那もつられる様に塔に顔を向けると、ここからでは見えやしない弟を思った。

繰り返す平穏の崩壊の行き先に何が待っているのか  
予想は出来ても、断言など出来やしない。

「まだなのか、まだ・・・なのか。」

シンとした暗闇の中で憂いを帯びたか細い声だけが響く。  
ささやかながらに吹く風はその鋭さを増して、凍えるような寒さがあつた。

青年が纏つ物はボロボロの薄い洋服だけで、他に暖をとるようなものも無い。

それどころか暖を盗んでしまつよつた重々しい枷が両手両足を掴んでいた。

「いや、もうすぐ間に違いない。もうすぐ・・・」

悲しみに染まつたその漆黒の瞳には何も映つてなどいない。  
いや、田の奥底に星の白銀に瞬いた小さな輝きがあった。

「もうすぐ僕の願いは叶つのだろう?ねえ・・・

・・・僕はもう疲れたよ。」

・・・まがい物だからここにはもういられないんだよ。

本当は知つていた。これは本物から零れ落ちた小さなカケラだった事など。

- - - 必要の無いものならば消えるのが定めでしょ？

すぐにどこかに消えてしまうのでしょうか？

- - - 誰かに見つけて欲しかった。誰かに気付いて欲しかった

見つけたのはほんの偶然で、月が細い日に空を見上げただけだった。

- - - 願いはきっと叶わない

一つに分かれて落ちた星の片方が塔に落ちていった。そっちが本物なんだろう。

- - - 願いは・・・叶わない

願いは叶わない。叶えられない。叶えてくれない。

- - - 結局はまがい物なんだ。

そり、結局はまやかしだと知っていたんだ。

消えてなど欲しくなかつた。

手のひらに乗せた小さな小さな希望の星。

零れた涙で流されてしまいそうな小さなカケラ。

切り離された存在であるこの星が、忘れられた自分を見ているようだった。

このまま縋つていたかった。

この閉ざされた柵を越えて行けたのなら、本物を探しにいけたのに  
聳えた塀が、繫がれた鎖が、動かない枷が邪魔をする。

変えようの無い現実に止め処なく涙が零れた。

温かい光を放つ星が悲しみを混ぜた涙の色に見えた気がした。

暗い世界の中で一人俯いたまま嘆く。

元はサラサラだつただろう桃色の髪が嗚咽にあわせて揺れる。

希望を見出そつと、時に苛立ちのままに動き回つた為に体中ボロボロだつた。

心の痛みが強すぎて、体の痛みが麻痺したようだつた。  
地に爪を立て強く握るも感覚が無い。

もうどれくらいの年月がたつたのか忘れてしまつた。

孤独と言つものがこれ程までに辛いとは思つたことがなかつた。

これは経験しないと分からぬ苦痛だろ。

涙の所為か、暗闇の所為か目が霞んだ。

月は欠け、空に浮かぶ星の光さえ届かない今、たつた一つの小さな光がもう見えない。

「僕の名を呼んで・・・」

辛うじて淡い光を放つていた星が静かに消えた。  
気が狂うような長い長い永い時の中、飽きる事無く願い続け、誰にも知  
られること無く一人死んでいった墮天使が居た

Chapter 2 Call me 11・僕く 散り逝く(後書き)

僕く散り逝く星に願うよ。己の存在意義を。  
たしかにそこには音が有つた。

刹那は他愛無い話を律那にしている。

「それでな、それでー」

律那は少し離れたところで大好きな紅茶を淹れてくれている。

それは刹那が望んでいるいつもの日常。

今日は外が少し肌寒かつた。だから、温かい紅茶が余計美味しい感じるだろう。

準備を終えたのか部屋の奥からトレーを持った律那が姿を現した。

「はいはい。せっちゃんが勿論勝つたん・・・」

不意に途切れる言葉

ガシャンと大きな音を立てて壊れるティーカップ。

これは好きだと律那が言っていたカップが粉々に散らばる。

床に染み渡る紅茶

「えつ？」

目頭を押さえて眉を寄せる律那

何か呟いたようだが、声の小ささか距離の所為か刹那には聞こえない。

そのままぐらりとその体は傾いて  
まるでスローモーションのよつに・・・

「・・・律那！」

律那が、倒れた。

\* + \* + \* + \* +

「大げさだよ、せつちゃん。少し目眩がしただけだよ・・・」  
小さな声で呟く律那の顔は心なしか青白く見えた。

動かない足を無理矢理叱咤し動かしてようやく律那をベッドに寝かせる事ができた。

震えが止まらない指先、珍しく強く鳴り止まない心臓  
(・・・なんで、なんで、なんで！！)

ベッドの脇にしゃがみこんで律那の顔をうかがう。  
どれだけ我慢してきたんだろう。どれだけ耐えてきたのだろう。  
大切な人が倒れるまで、その不調に気が付かなかつたなんて。

「泣かないでよ。せつちゃん。」

「・・・泣いて、なん、か」

律那の手がやんわりとした動作で刹那の頬に触れる  
その指先には冷たく輝く涙の雫があつた。

「ほら、泣いてる。」「つづう、だつて。」

(気付いてやれなかつた。頼つてもらえなかつた。

辛いなら俺を呼べば良いのに・・・(・・・)

「大丈夫だよ。まだ、大丈夫。」

「・・・」

(まだ・・・なんて)

「ほら、律はちゃんと今生きてる。」

縋りついた律那の手は、温かく生きている音がしていた。  
刹那の震えが伝わっているのだろう。頬に置いていた手を移動させ、  
頭を優しく撫ぜる。

律那の優しい手に、その温もりに刹那の震えが治まっていく気がした。

荒くなりかけていた呼吸を意識して戻すように深呼吸をする。

「落ち着いた？」

「ああ。」

温もりのお蔭か律那への不安や失う恐怖は和らいだものの、次第に  
自身への苛立ちが募つてくる。

刹那はシーツをきつく握り締めた。

(くそっ！俺は律那を守れないのか・・・！)

なんて自分は無力なんだろう。なんて自分はこんなにも未熟なのだろう。

力が欲しかった。大切なモノを守るだけの力が。

しかし、自分の力不足をこの場で嘆いて居た所で何も状況は変わらない。

最後まで諦めない。足搔いて足搔いて刹那に今出来る事は頑張るしかない。

落ち着いて律那を見てみると調子は悪そうだが、彼の言ひよう

まだ”大丈夫な気はする。

しかし、何とも無いとでも言つような表情に少し焦りを感じた。

諦めの意思が見え隠れするそんな表情に刹那は一人眉を寄せる。

(俺はそんなに頼りない?)

「俺が・・・、俺が!見つけてみせるから、治してみせるから・・・」

(無理だよ。律だって見つけられなかつたんだから。)

「絶対だ、絶対。俺がお前を守つてやるから!・・・」

(もう良いよ。律はそんなの望んでないよ。せつちやんが傷つくな  
は見たくないんだよ。)

「だから、だから・・・」「・・・」「・・・」

律那の顔は泣き笑いのようになんで見えた。

(そう簡単に、諦めるなよ・・・!)

その紅に映るのは先ほどまでの不安に揺れる色ではなく、先に進む  
揺るがない決意と強い意志が見て取れた。

## Chapter 2 Call me 12・終りの始まり（後書き）

終りの始まり

それが終焉だと叫びのならば、先の始まりを探してみせる。

静まり返っているはずの城の廊下を大きな騒音を出しながら走る。けたたましい足音と心臓の音が不協和音を奏でるがそんな事知らない。

もう、構ってなど居られない。

葎那が倒れた。呪いが見つからない。

それだけが刹那の頭の中をグルグル回っていた。どうする事も出来なくて、そんな不甲斐無い自分が情けなかつた。また流れそうになる涙を強引に腕でぬぐつて、俯きがちな思考に入る「」を叱咤する。

走る、走る。

自身でどうにか出来ないのなら、他人に。一縷の望みに縋るしかない。

刹那が頼りにできる人など、葎那以外には魔界にたつた一人しか居ない。

「姉様！じいや！」

目的の部屋に辿り着くと、思い切り良く扉を叩き開けた。

\* \* \* \* \*

「そつか、葎が・・・」

遠い目をしながら一言だけ杏那は呟く。

刹那は今しがた起こつた事を身振り手振り付きで精一杯詳しく話した。

もう、なりふりなど構つていられない。

そんな刹那の様子に杏那は人知れずため息をつく。

杏那は部屋の玉座に、執事と刹那はソファードに、お決まりの定位置に座っている。

大きな窓から見える塔は相変わらずピンと背を伸ばして立っていた。

「俺は、俺はどうすれば良い。どうすれば葎那を助けられる?  
姉様、じいや・・・助けてくれよ・・・！」

「それは・・・」

「それは、残念ですけど僕たちでも無理です。刹那君・・・」

言いよどむ杏那の代わりに執事が淡々と答える。

「そんなんあ・・・」

「これでも、手を尽くしたんですよ? それでも・・・僕たちは力及びませんでした。」

肩を落とす刹那に普段よりは労わる様な口調で執事は言う。  
そんな様子を杏那は横目で見つつ、黙つたまま口を開かなかつた。

「それにしても、君達が見つけられない呪いをかけられる悪魔がこの魔界に居るとは僕は思えません。

しかし、かけられそうな人物と言えば・・・」

目を細めながら告げる執事に刹那は息を呑む。

(・・・たしかに、そうだ。俺達よりも力が強い奴なんて・・・)  
よくよく考えてみると、力が強く敏感な彼ら双子の上を行く悪魔なんてそう居ない。

双子よりも力の劣る悪魔達でも協力し合えば可能かもしれないが、  
基本個人主義の悪魔達が力を合わせて・・・など考へるはずが無い。

そうなると、純粹に力の強い悪魔としか考えられない。

「まさかっ、まさか・・・母様が？」

「いや、それは無いだろ。母上殿が葎を殺そつとするなら・・・あの人ならそんな回りくどい事をしなくても乗り込んでいつて自らの手で殺すや。

彼女は唯一葎を殺しても誰も咎められない。なんたって魔王だからな。」

刹那の頭に浮かんだ嫌な考えをすぐさま杏那は首を振つて否定する。態々こつそり行動しなくとも、魔王である彼女は堂々と殺せる立場にあるのだ。

それは序列一位に位置する杏那もそれは同じ。

いくら杏那が呪いに特化していてもそこまで面倒な事を彼女はしない。

「それに、呪いにはかなりの労力をします。僕が見ている限りでは・・・

あんなにも根気良く呪いをかけ続ける精神力が強い人など、そういうないです。

だから、もしかしたら呪いでは無いかも知れないです。

「そつ、そんなん！じゃあ、病氣だつていうのか？」

「いや、そうとも言えないだろ。アタシと葎は良く似ている。双子のお前よりも作りが似ているんだ・・・

自分の頑丈さはアタシが良く知っている。それは葎も・・・お前だつて同じだろ。」

重々しく口を開いた杏那はまた刹那の考えを否定する。

「じゃあ、じゃあ・・・何だつて言つんだよ。

“何の所為”で葎那は苦しんでいるんだよ・・・！」

悔しそうに唇を噛み締めて綻るよう一人を見る刹那。

まるで我が事のように苦しそうな顔をする刹那の瞳には流れてしまいものの、潤んで涙に歪んでいた。

「だから、アタシにはお手上げなんだ。刹

「律那君の知識力は魔界で右に出るものはいません。

その彼でも分からぬのなら・・・」

言葉を濁した執事の後に続く言葉は何もなく、部屋を沈黙が埋め尽くした。

重い、沈黙だけを残して止まる余韻

その問いの答えを持つものは、この場には存在しなかつた。

思い切り駆け出したけれど、縛れる足に  
どうしようもなく苛立ちを覚えた。

城の地下深くに続く階段を刹那是一人駆け下りる。

そこは城の内部よりも静寂が広がり、少し淀んだ臭いのする冷え切った空気が流れていた。

一段、一段降りるたびに冷える温度。吐く息が白かった。

太陽の当たらない場所、魔界の底へに続く道だ。

薄着な格好には堪える。コートを羽織つてきて正解だったと刹那是思った。

姉で自分よりも多くを持つ杏那も、違う世界から召喚された悪魔ではない執事も駄目だった。

葎那の事を無いものとして扱っている母親など頼りに出来るはずがない。

それでも、諦めたくはなかった。

(諦めるなんて出来ない。立ち止まつたら、そこで終わりだ!)

階段を下り終え、大きな扉の前に立つ。

刹那の背の何倍も高さのある黒い羽と白い羽の模様があしらつてあるその扉は城の中のどの扉よりも異彩を放っていた。

魔界にて天使を表す白い羽がある場所などここくらいだろう。

天使の物も異界の物も多少紛れ込んでいる。唯一その存在を許された場所。

他の世界と一番近いとされる、そこは王家のものしか入れない書庫だ。

ここには貴重な物から、持ち出し厳禁の隠したい物まで何でも揃つ

ている。

答えを知る人が居ないなら、頼れる人が居ないなら  
(・・・呼び出せば良いんだ。)

刹那は最後の賭けをするつもりで居た。

悪魔とは違った視点から原因を見つけてくれるかもしれない異界の者を呼び出せたなら、律那が助かる事が出来る気がして。

寒さの所為で鼻の頭が赤い。未だ寒さになれない体に鞭打つて刹那は冷える扉に手をかける

長年使う人がごく僅かな為かすべりの悪い扉を体全体で押し開けるとむせ返る様な紙の臭いがした。

\* + \* + \* + \* +

埃っぽい空氣に眉を潜めながらも、刹那は埃舞う書庫を手当たり次第にあさる。

刹那自身、本を読む事は苦手だ。難しい言い回しや難しい事は良く理解できない。

特にこの書庫は古い本や難しい本が沢山ある。刹那には普段絶対閑わらない場所だ。

しかし、一時期律那が暇を持て余して籠つていた事がある。その時確かに言っていた。他の世界の記述してある本や使い魔召喚の為の本がある事も・・・

どんなに難しい事でも律那の言葉は覚えてる。

律那は言った。

「使い魔は便利そつたけど、今の律達じゃ絶対無理そつたよ。

魔方陣も、詠唱も入り組んでいたけれど頑張れば出来ない事は無い。後、力は今の状態でも十分だと思うんだ。

だけど、コントロールが難しそうだね。そこが一番の難関みたい。優秀な使い魔にピントを合わせられるか。それが重要。変な物呼び出しても困っちゃうからね。

流石のりつちゃんも、そんな無謀な賭けに出る自信無いな・・・。切羽詰っての目的があれば、何とかなるかもしれないけど・・・。

今は難しそうだね。」

力は十分。難しそうなところは根気で頑張る。

刹那は今、切羽詰まってるし、律那を助けると言つ絶対的な目的もある。そして意気込みも十分だ。

(今だつたら、出来る氣がする。

・・・いや、絶対に成功させてやる!)

大切な律那の為、なんとしてもやり遂げると刹那は使命感に燃える。彼の紅い瞳にはやる気の鬪志が見えた。

沢山ある本棚を上から下まで睨むように見ていくながら本の背表紙に使い魔・召喚の文字を探す。

律那は何処にあると言つていただろうか。思い出そうと考えてみたけれど、流石にそこまでは言つていなかつた気がする。

『天使の生態』、『Noir全集』、『追走曲外伝』、『凶悪なる魔物と魔法生物図鑑』、『x-s Fantastic The

全く関係無さそうな本なら沢山ある。今は必要ないが剎那の興味引かれるタイトルもいくつかあった。

こんな本達に何の価値があるのかと疑問に思つが、ここにある以上何かしら曰く付きなんだろう。

それよりも、律那がこの本全て読破していると言つ事実に剎那は驚きが隠せない。

(しかも、内容殆ど覚えてるんだからな . . . )

こいつは律那の頭にあるサフライアが羨ましくなる。

一つ、また一つと本棚を見て回り奥へ奥へ剎那は進んでいった。寒さの所為と埃の所為で鼻がむずむずしてくしゃみが出そうだ。  
『日常から復讐まで役立つ呪いベスト100』、『愛しい彼の殺し方』、『暗黒魔界史』、『Cross Knight 設定集』 . . .

・  
(ん?)

「こんな所にあつたのか . . . 」

剎那は一冊の本を抜き取ると表紙を撫ぜた。  
律那が置いていったのだろうか、『Cross Knight 設定集』は剎那が創り途中で放り投げていた物だ。

( . . . 持つて行こう)

続きを後で創るうと剎那は背負つていたリュックにしまつ。

( . . . て違う！探してるのはこれじゃないだろ！ . . . )

もう半分以上見たのか。それでもまだ一番奥まで辿り着く事はまだまだない。

剎那は大きく伸びをして体を解した。こいつは作業はどうしても慣れて無いため辛い。

薄暗い部屋の中では目が疲れるが仕方ない。目元を掴んでマッサー

ジすると刹那は再度作業に戻る。

『黒の王の謎』、『涙姫』、『使い魔』・・・

「あつ、あつた！」

刹那の目線よりも高い列にしまわれたそれに飛びつくと抜き取った。

『使い魔の召喚法』

寒さの所為か嬉しさの所為か手が思うように動かない。

刹那は凍えそうになる手を握ったり開いたりの繰り返しで解しつつ、リュックから水筒を取り出す。

水筒に入れて持ってきた紅茶は保温効果でとても温かかったが、いつも入れてくれる律那の紅茶では無い所為か、急いで準備してきた所為か・・・

あまり美味しく感じなかつた。

それでも先を田指す足は止まる事はせず  
何があつても振り返らないと決めた

早速見つけた『使い魔の召喚法』の本を片手に刹那は本棚から移動する。

移動するといつても同じ書庫内だが、本棚から少し離れたそこは質素ながらテーブルと椅子が置いてあり少し開けた場所で本が読めるスペースだ。

傍らにリュックを置き、椅子の埃を軽く落として、少し咽ながらも刹那は座る。

刹那は頑張るぞと意気込みと共に本を開き始めた。

(順序通りに書き記す?エッシャルグラード……呪文か、これは?  
?)

難しい言葉の羅列で頭が痛くなる。

一ページ、いや一文字一文字頭に叩き込むように読み解いていくが刹那には酷く難しかった。

それでも、刹那は読む手を止めない。

(大丈夫。俺なら……できる。絶対理解も出来る)

何度も何度も同じところを繰り返し、何度も何度も行き詰りながらも難しい本を読み進める刹那はいつに無く真剣で凄い集中力だった。時にページを戻り、ゆっくりゆっくり時間をかけて少しづつ……

きっと以前に執事を召喚したと言つ経験を持つ杏那に聞けばもっと早く理解出来るかも知れない。

すでに読み終えており頭の良い葎那に聞けば良いアドバイスをもらえるかもしれない。

しかし、刹那が話をした時点では止められる事は間違いない。  
(そんな事になつたら、どうすれば良い?諦めるしかなくなる。

そんなの絶対に嫌だ。これが最後の希望なんだから……（

刹那は時間が経つのも忘れてひたすら一冊の本に向き合い続けている。

\* + \* + \* + \* +

「つだー！」

奇声と共に刹那は本を放り投げ頭をかきむしる。  
どれ位時間が経つたのだろう。時計が無いから時間の感覚が分から  
ない。

外では刹那がいないと騒ぎになつてゐるだろつか。きっと勉強の時  
間をとつくるに過ぎてゐる事は間違いない。

一応、書置きを置いてきたが役に立つてゐるかは定かではない。  
誰にもここにいる事は言つていらない。もちろん杏那にも執事にも。  
事情を知つてゐる彼らは刹那の居場所を聞かれた時、誤魔化してく  
れるだろつか。

刹那の為に飛び出して勉強や、やる事を投げ出して救う方法を探し  
てゐるとなれば部屋に拘束されてしまつ。

こんな辺鄙な所見つかるとも思えないが、後々が面倒くさい事にな  
る。

机に突つ伏して放り投げた本を見る。

軽食にと持つてきていたパンや菓子類も食べ終わり、水筒の紅茶も  
随分冷えてしまった。

それなのにも関わらず、本の内容を完璧に理解したとは言い切れな  
い。

これでも刹那にしては頑張った方だろつか。七割、いや八割方頭に叩  
き込んだ。

だが、まだまだ不安な要素は沢山ある。

(・・・もう一つその事ぶつけ本番してみるか?)

だけど、失敗を考えると慎重に行動しなければならない。

絶対に成功させたいのだ。本にあつたように使い魔ではなく凶悪な魔物なんて召喚してしまつてはたまつたものではない。

「つあーっ、ちょっと気分転換でもするか。」

立ち上がり伸びをしながら、凝り固まつた体を解す。

首や腰を回すと気持ち悪いぐらい豪快に間接の鳴る音がした。

刹那は先ほどまで見ていた本棚の続きをあさつてみる事にした。一冊見つけた喜びですっかり忘れていたが、もしかしたら召喚の参考になる本が他にもあるかもしれない。

『迷路探偵物語・上』、『終わりの世界』、『宵闇小路』・・・

(無いなあ・・・)

見落としが無いよう一つ一つきちんと背表紙を確認しているが見当たらない。

これだけの冊数があるのに、関連する本が全く見つかないとなるとやはり存在しないのだろうか。

本棚を前に刹那は大きなため息をつく。

(そろそろ、読解を再開するか。)

よし、と氣を取り直した瞬間。

「いつ!」

突然背後から頭を殴られた衝撃。衝撃とは言つても痛みより、驚きの方が上だ。

ビクリと持ち上がる肩に、背中に流れる冷や汗。

今まで何も感じなかつたのに、急に恐怖で震え上がる体。

「クスクス」

いつから居たのだろうか、急に現れる存在感に刹那は身を竦ませる。  
(この声、この存在感・・・・)

何故ここが分かつた? 何故ここに入れる? 何故何故? 刹那の頭の中を疑問がグルグル回った。

しかし、そんな事疑問に思つている暇は無い。

ギギギと音がしそうなくらいぎこちなく固まつた体を動かし恐る恐る振り返り背後を伺う。

「僕の辞書に不可能の文字は無いんです。」

(ちょっ、怖ええええ! )

満面の笑みを浮かべた、いや、田だけ笑つていらない最凶笑顔を浮かべ刹那を見下ろす執事の姿があつた。

\* + \* + \* + \*

「いやあ、あの刹那君の顔! とっても素敵でしたよ。」

うつて変わつてにこやかな笑顔で対応する執事に、机に突つ伏して生氣を抜かれたような表情の刹那。

二人は本棚から移動し、開けたスペースで椅子に座つていた。

「あまりの驚きに尻餅まで付いて・・・」

「あーもう! いい! ! ・・それより、どうしてここに?」

「どうして? つて、マスター命令で刹那君の活動を見守りに。僕に隠れて何か出くると思います?」

「・・・」

クスクス笑い楽しそうに話す執事に刹那は投げやりだ。  
からかいの所為か、見つからてしまつた所為か悪戯がばれた子供のように不貞腐れてそっぽを向いている。

「やれやれ、別に僕は君を咎めに来たわけでは無いです。

まあ、マスターには危ない事しそうなら縛つてでも止めると言わ

りますけどね。

今は刹那君本読んでるだけですし。危なくないので僕は止め無いです。」

「・・・うん。」

「しかし、その本を読んでこると云ひつ事は、相当の覚悟がおありのようで・・・

ですから、これは僕からの餞別です。」

「これはっ、

手渡されたのは、薄いノートのような冊子だった。

バラバラ捲つてみると手書きの右上がりな文字がぎっしりと書き込まれていた。

召喚の為の魔方陣や守るべきポイントについて詳しく述べてある。

刹那は目を見開いてノートと執事を交互に見やる。

(これは、姉様の字・・・だ。どうして?)

これでは危ない事を推奨するようなものではないか。

命令もあるのに、逆らひのような真似までして手伝ひのような事てくれるのか。

「僕はこれから君が何を成すのか想像が出来ない分興味があります。

刹那君なら僕の期待を裏切らず面白い先を見せてくれそうですし・

もう、これ以上彼女を・・・いや、苦しみに至る金の田など見たくないんですよ。」

「じいや?」

最後の方が小さな声すぎて剎那には届かなかった。

執事には不似合いな哀しそうな笑みを浮かべていた気がしたけれど、一瞬過ぎて本当に浮かべていたのかも分からなかつた。

前髪に隠れた瞳には一体何を映していたのか。普段とは違う雰囲気を出した執事に、剎那はしつかり見ておくんだつたと少し後悔した。

「なんでもないです。

それでは！僕はマスターの本を書庫に置きに来ただけですのです。  
剎那君は方法を探して苦手な読書中です。

特に問題は無いので僕はこれで失礼します。

・・・勿論、マスターには内緒です。」

悪戯っ子のようにお茶目なウインクをしながら執事は笑つた。

彼の思いと彼の願いと、彼女の残像に  
全てが自分本位な世界の中で違つものを見出したい

執事が居なくなつてからと言つもの、先ほどよりも心なしか嬉しそうな顔で机に向かう刹那がいた。

貸して貰つたノートと探し出した本の一冊を照らし合わせながら読み解を進める。

(・・・これ、分かりやすい!)

杏那のノートは凄く分かりやすく重要なポイントもしつかり押されてあつた。

彼女が使い魔召喚する際に自分用に纏めたものなのだろう。使い魔に関する考察から、杏那が実際に行つた時の順序過程や注意すべき場所など丁寧に書き記してあつた。

基本、面倒くさい事が嫌いな人だが、急がば回れが出来る人だから。その下調べや下準備が半端無かつた。

(姉様に感謝しなくちゃ。)

内緒なので本人には直接お礼は言えないが、心の中だけで言つておく。

驚きのあまり執事にもお礼を言いそびれている。

絶対に召喚を成功させて、執事が言う面白い先かは分からないうが、葎那を助けて大どんでん返しを見せてやるうと決めた。

それにもしても、このノートは読めば読むほど面白い。刹那は難しい物は嫌いだし苦手だが、分かりやすい話は好きだ。

例え難しい内容の本が理解できなくても、葎那が言い換えて話すの本の内容なら理解できた。

だからだろうか、少し碎けた口調で書いてあるそれは刹那にはとて

も読みやすいものだつた。

長くの時を一緒にすゞしていいた訳では無いが、流石姉弟だけはある。自分が間に入らなければ交流出来ない姉弟だが、似ると言つのはそんな事は関係ないらしい。そんな杏那と葎那に少し笑つた。

読み進めると今まで自分では理解していたつもりだった箇所もノートを見ると実際理解していなかつた部分もあつた。

杏那の読解は斬新で別視点から見る考察に目から鱗の気分にもなつたし、

失敗談を書く口調には悔しさが滲み出でいて悪いと思いつながら刹那は少し笑つてしまつた。

(こ)の調子なら、もう少しで・・・)

全て読み解く事が出来るまであと少し。

刹那は集中してラストスパートに入った。

\* + \* + \* + \* +

(・・・よし)

広くなつた部屋の中央で刹那は腰に手を当て一つ頷く

今まで使つていたテーブルと椅子を部屋の隅に引きずつて置いた。簡易的な代物だったので動かすのは思いのほか楽だつた。これが城の他の部屋だと豪華な物が多いので、そうはいかなかつただろう。床の埃を少し掃除しつつ片付けたら、中々広い空間が確保できた。逆に刹那の洋服が埃まみれになつてしまつたが、それは仕方が無い。

魔界の底、異界と一番繋がりがあるとされるこの場所で刹那は召喚をしようと思った。

本当は天使や異界の物が置いてある場所と言つ意味合いでしかないのだが、何処よりも隔離され、異彩を放つ扉に守られ、何処よりも冷たい空気を纏うこの場所が召喚するのに相応しい気がした。

実際、杏那が執事を召喚する際にもこの場所を使っている。

ノートによると他に邪魔されずに集中できる場所が無かつたためと書いてあるが、その通りなのだろう。本にあるように場所は関係が無い。

しかし前例に倣う訳では無いが、ここなら成功できる気がした。

『使い魔の召喚法』の本を開きながら脇に置き、ノートを片手に作業を始める。

失敗は許されない。いや、下準備の失敗はやり直せば良いのだが、体力が持たない気がした。

実の所、ノートによるとこの下準備が一番大変らしい。

確かに記してある魔方陣の図面は複雑で入り組んでいて面倒だ。しかもそれだけではない。

魔方陣のあちらこちらには違った種類の属性の力を込めなくてはいけないし、正しい順序で書き記さなくてはならない。途中言霊の呪文も必要だ。

実際に本番よりも大変な作業である。

異世界との媒体にする為の呪具・・・いや召喚具と呼ぶべきか。それは刹那のお馴染みの人形にする事にした。

兵士の姿をした人形、アッサム。この人形は他とは少し違う。

この魔界では珍しい宝石状のサファイアが左目ボタンの代わりに取

り付けてあるのだ。

サフィアを見つけた当時は貴重だと言われても、刹那にとつて使う事は無いしただの石ころ同然だったのだが、持つていて損は無いと葎那に言われて大切にしている人形の一つにくつ付ける事にした。ほんの小さなカケラだが、それがこんな所で役に立った。

サフィアは力の象徴、そして力の源。これに刹那のありつたけの力を込めて媒介にすればこれ以上無い召喚具となるだろう。

刹那は瞳を閉じ、一つ大きな深呼吸をして緊張を和らげる。

さあ、ここからが正念場だ。

幸せ未来計画始動

幸せで楽しい未来が見える気がした。

忙しく部屋を駆け回り、時にブツブツ呪文を唱え、力を込める為に座り込む

一見知らない人から見れば奇妙な行動だが、やつている本人はとても真剣だ。

あーじゃないこうじゃないと独り言を呟き、ノートを捲る。その額には汗が滲み、張り詰めた意識の所為だけでなく力の消耗も伺えた。

それでも、作業は休む事無く続く。一度止めたら、一度との集中力は出せない気がした。

刹那以外の静寂に埋もれる部屋にピンとした空気が張り詰めていた。

\* + \* + \* + \* +

「・・・完成だ！」

冷えた室内にも関わらず出た汗を拭うと刹那は満足そうに田の前の魔方陣を眺める。

下準備はこれで完璧だろう。

可笑しなミスも無くスムーズに事を終えることが出来た。これも全て杏那のノートのお蔭だろう。

後は、呼び出すだけ。

この先からは刹那の力量とコントロールの問題だ。

(大丈夫だ。俺なら、召喚できる)

葎那の為に、心の準備も万端だ。

喉が張り付いて言靈が言えないなんて事は困ると思い、

もう温もりが一切無くなってしまった紅茶の最後の一一杯を水筒からいれると思い切り良く飲み干した。

空になつた水筒をリュックにしまい込むと邪魔にならないよう遠くへ放り投げる。

その後、刹那は気合を入れて魔方陣の前に立つ。

それは半径五メートルはありそうな大きさで、複雑に文様や文字が絡みついていた。

刹那から見て魔方陣の上部、彼の立つ位置とは反対側に位置するそこには不釣合いな可愛らしいアッサムの人形がちよこんと座つている。

小さなカケラにありつたけの力と願いを込めた。

一通り魔方陣を見渡し、最後の確認すると何度も深呼吸をし心を落ち着けた

そして、大きく息を吸い込んだ。

「我が声が聞こえし者よ、我に力を与えし者よ！

我が名は“刹那” 汝を統べる者

」の声を導に我が前へ来い！！

力を乗せた声を魔方陣に向かつて張り上げる。

それに呼応するようにアッサムが浮かび上がり左目が輝いて魔方陣

の中央に向かう

手を前に突き出し刹那は力を魔方陣に集中させる。右に位置した十字が光り、左に位置した呪文字が溶けた  
息苦しさに眉を潜めるも、まだ見ぬ異界の地に神経を集中させる  
汗が頬を伝うのが分かるが、絶対にここで焦つてはいけない。

(・・・見つけた!)

力に引っかかる確かな感触を見つけた。どこか遠くから呼応するノイズがかかった声が聞こえる。

刹那は足が震えるのを感じながら、激しく鳴り響く地鳴りの様な音に耐えた

すると、魔方陣は眩いばかりの光を放つて周りを回るよじに徐々に風が舞い踊る。

同時に部屋中に広がるむせ返る様な甘ったるい香り  
(これは・・・花・・・か?)

刹那は花に詳しくない為なんの花かは分からない。

ノートにはこんな匂いの事など書いていなかつたのに、これは召喚される者の違いだろうか

その風は止まる事無くどんどん強くなる。それは魔方陣の前に立つ刹那にも襲い掛かり軽い刹那は足に力を入れていないと簡単に吹き飛ばされてしまいそうだ。

不思議な事に刹那以外の物には何の影響が無いらしい。

これだけの強風が吹いていても近くの本一つ飛ばない。

「つ・・・！」

あまりの突風に腕をして顔を庇うが目を開けていられない。  
しばらく踏ん張っていたが耐え切れずに少し飛ばされて後ろに尻餅をついた。

地に近くなつたからか、吹き飛ばそうと吹く風とは逆に魔方陣の中に力ごと体を引きずり込まれそつになる。これに巻き込まれてはいけない。

魔方陣の中に体の一部分でも入つてしまえば召喚するビル川が逆に飲み込まれてしまう。

チカチカして目が痛い。風は止まない。

それでも見つけたものを離す事はなかつた。

じわり、じわりと何かの気配が魔方陣の中央に現れている感じが分かる。

召喚に成功しているのだろうか。未だ魔方陣の様子が伺えない。何だろうこの感じは。刹那が感じる執事とも違う威圧感があつた。刹那の背中に冷や汗が流れる。怖い。どうしようもなく凶悪なもの呼び出してしまつたのではないか不安で仕方が無い。

それでも、ここで止める事はしない。止める事は出来ない。

(・・・何か居る!)

気配が完全に現れたと同時に風が少しずつ止んでいくのが分かる。魔方陣から感じる威圧感も徐々に減つて言つた。

全てが元に戻る。魔方陣の中の気配だけを残して。これが召喚終了の合図だ。

力を使い果たした刹那は荒い息を繰り返す。

眩しさの所為で目を瞑つているのに目が可笑しな感じだ

周りの空気が正常に戻つていいくのが分かる。花の香も薄らぐ。

目を閉じても気配が動くのが分かる。

使い魔と対面しようと刹那は早く落ち着くよつ努めた。

ようやく落ち着いた刹那は薄つすらと目を開いた  
その視線の先に未だ光を放つ魔方陣の中に小さな人影が映つた。

Hello Hello Hello!  
こちらの声が聞こえますか、どうぞ

(・・・ん？小さな人影？？)

視力が早く回復するよう擦りながら刹那は目を凝らす  
先ほどの風の影響で砂埃が舞つて視界が悪い

人がちゃんと存在している事から召喚には成功しているようだが。

「つ、誰か・・・居るのか？」

「！」

埃で喉が咽る。力を使い果たした所為か、刹那が出した声は小さい  
ものだつたが相手には届いたらしい。

パタパタとこちらに移動してくる足音が聞こえる。

それを固唾を呑んで待っていた刹那だが、によき！っと刹那の目の  
前に現れたのは同じくらいな小さな子供

こちらを見る真ん丸い大きな茶色い目がキラキラ輝いていた。

華奢な体に刹那と同じくらいであろう小さな背。

魔界ではあまり見ない随分と可愛らしい洋服を身に纏い、その愛ら  
しい容姿は庇護する立場ではなく逆に庇護をしなければならないよ  
うに感じる。

余程嬉しいのかギザギザな尻尾がゆらゆら揺れていた。

張り詰めていたものが一瞬で緩んで、刹那は一気に脱力した。無意  
識に止めていた息を思い切り吐き出す

目の前のものは想像していたものと全然違う。  
執事のように大人な人が出てくると思っていた。

勿論人型ではない使い魔も存在する。気高く強そうな獅子の様な使  
い魔を想像し、そんなのも良いと思っていた。

しかし、刹那の田の前にいるのは・・・

(何だ、子供じゃんか)

使い魔は尻餅を付いている刹那にあわせてしゃがみ込むとずいっとキラキラした眩しい笑顔で刹那に近づく。

「あなたが、ましたーなんでしね！」

(・・・ましたー?)

「しゅごいでし、しゅごいでしー中々辺鄙な所に一族はいましゅから、召喚しやれる事なんて無いと思つてたでし。」

(・・・はい?)

使い魔から矢継ぎ早に繰り出された言葉はサッパリ何語だか分からぬ。

刹那が混乱している所為もあるのだろうが全然頭に入つてこなかつた。

こいつては何だが、刹那の頭の回転はそう速くない。

付いていけずに目を白黒させながら頭にハテナが浮かべているのが、目の前の使い魔には全く伝わっていないらしい。

使い魔は長い袖を振り回し楽しそうにマシンガントークを続ける。

「ましたー！ましたーはしゅごく強いんでしね！ビックリでし。うちの一族を呼び出すのは本当に難しいんでしょ。」

あつ、ましたーまじゅは何をしゅれば良いんでしか？悪者退治ですか？それとも人だしゅけでしか？こう見えて家事も得意でしょ。でもその前に・・・」

「ましたー、お名前くだしゃい

使い魔に名前を付ける事で契約が完了する。

はつと刹那はノートに書いてあつた事を思い出す。

よつやくシートしていた思考回路が戻ってきた様な気がした。

\* + \*

「・・・えーと」

「（フクワク）」

「・・・んーと・・・」

「（キラキラ）」

「・・・」

期待の籠つた視線で見詰めて来る使い魔に刹那は遠い目をするしかなかつた。

刹那は名前など全く考えていなかつた。召喚すると言つ事しか頭に無かつた所為である。

そのため熱い視線が非常に苦しい。

その場でと言われても、急に思いつくほど柔らかい頭を刹那はしていなかつた。

なるべく目の前の使い魔を視界に入れないように逸らすと、ふと刹那の視界に可哀相にも埃にまみれてうつ伏せに転がっているアッサムの姿が目に入った。

そして、ピンと名案が刹那の頭に浮かんだ。

（・・・これだ！）

「そうだ、お前は“ニルギリ”だ！」

どうにか普段の落ち着きを取り戻した刹那はいかにも堂々と名を宣言する。

「ニールギリ・・・ニールギリ・・・！じゃあ、ニールでしね。うふふ。とっても、しゅてきです。このお名前をニールは大切にしゆるでし。」

周りに花が飛びそうな笑顔で幸せそうに笑うニールギリ。そんなニールギリを前に刹那は顔が引き攣るのを感じた。

（・・・言えない、さっき飲んでた紅茶の名前だなんて・・・）  
ようは、適當だ。しかもぬいぐるみに名前を付けるノリだ。特に由来なんて無い。

「あはは

（うん。まあ、“執事”と名付けた姉様よりはましだよな。うん。きつと。

ダージリン・アッサム・ニールギリで三大紅茶だし。媒介にアッサム使ったし・・・

後付けだけど聞かれたらこう言おう・・・

それに何より、名付けられたニールギリは幸せそうである。

本人は名前の意味を理解はしていないだろ？。多くは突っ込むまい

「うふふ。

刹那の空笑いとニールギリの幸せそうな笑い声が書庫に響いた。

何はともあれ、刹那は無事使い魔の召喚に成功し、契約する事が出来たのであった。

はーはーはーはー！

そちらの声しつかり聞こえます、どうぞ

『さ』と『す』が言えない為こもはや暗唱。

頑張つて解誦してください。

一ル語

「それで、ニルはまず何をすれば良いんでしょうか？」

首をかしげて能天気に喋るニルギリの姿に刹那はハッと我に返った。こんなのがんびりと、のほほんとしている場合ではない。

葎那の容態は一刻も争うかもしれないのだ。

こうしている間にも、塔の部屋で葎那は一人苦しんでいる事だろう。

「お前、呪い解けるか？しかも、うんと強いやつ……いや、呪いかも分らないんだ。その“何か”をお前解けるか！」

刹那は胸倉を掴み揺すりながら、必死に問う。

先ほどまでの穏やかな空気は何処に行つたのか、顔など切羽詰った酷い顔だ。

なにせ、大切な片割れの命が掛かっている。

刹那にとって、ニルギリが最後の希望なのだ。

「落ち着いてくださいやああああい！」

「苦し・・・ギブ・・・ニルもう、ギブでし・・・！」

思い切り詰め寄られたニルギリは言葉通りに今にも沈みそうな顔色だ。

詰め寄る刹那の勢いよりも増して、口から何かが出て行きそうな勢いである。

「あっ、悪い・・・」

「ゲフフ、大丈夫でし。ニルは強い子でしから。」

胸元の洋服の皺を伸ばしながら深呼吸を繰り返す姿は全く強い子には見えないがどうなんだろうか。

むしろ弱すぎに見える。

召喚の際の威圧感は錯覚かと刹那はいたとか疑問に思つた。

（どうせ、いいつとは接し難いな・・・）

どんな空気でも一瞬にしてほほんな雰囲氣にしてしまうニルギリに脱力する。

「で？」

「言葉で言われただけじゃ分らないでし。実際見てみないとなんと  
も・・・

「よしーじゃあ、早速行くぞ！－」

ふつ、ふええええええええええええ－－－

思い立つたが吉田とでも言つよつて、言葉と共に刹那はニルギリの手首を掴むと無理矢理駆け出した。

「ひええええ！」

何やら奇声が聞こえる気がするが気にはしない。

例え、ニルギリがどう思おうと蓮那の元に一刻も早く行く事が最優先だ。

刹那は扉を無造作に開け放ち、長い長い階段を駆け上がる。早く早くと急く心は来た時と違い、昂つているのを感じた。段々と温かく感じる温度に、一步一步太陽に近づいていく感じに、心が軽くなつていく気がした。

そう、それに今は一人じゃない。

刹那はチラリと後ろに視線を向けると、引き摺られる様にして状況を理解できずに目を回しながら付いてくる自身の使い魔にため息を

一つ零した。

\* + \* + \* + \* +

ドタドタと大きな音を立てて廊下を駆ける子供の足音が聞こえる。こんな音を立てて、城を移動する者など刹那しかりえない。しかし、普段ならば刹那一人きりのはずなのに何故か複数に聞こえて自室に足を進めていた杏那と執事は驚いた。内容までは聞き取れないが、大声で話しながら走つてもいるようだ。その所為で、酷く騒音に聞こえる。

「刹那様・・・と誰でしょう？」  
(もう一人と言う事は、使い魔の召喚に成功したと。さすが王族様ですね。)

「いや、知らんな。そもそも子供なんて城内に入れないだろう。」近づいてくるのを見る限りどうやら、刹那と同じくらいの背のようだ。

「おい、刹・・・

「ごめん姉様、じいや！俺、急いでるっ！」

慌ただしくこちらに目もくれないで嵐のように過ぎ去つてしまつた。杏那の途切れた言葉と、中途半端に上げられた右手が哀しい。抗議しようにも、バタバタ過ぎていつたその姿は遠かつた。

勢いがあつたために一瞬しか顔は見る事が叶わなかつたが、ギザギ

ザの尻尾が揺れるその後姿が執事の目に焼きついた。

（まさか、まさか、いや、まさか・・・）

止まる事無く過ぎ去つていった人物に執事は信じられない・・・いや、信じたくない気持ちで一杯になつた。

しかし・・・

横にいる杏那の顔を見る。

珍しくもキヨトンとした表情のまま通り過ぎた一人の方を向いており、その瞳は執事を映す事は無かつた。

（姉が姉だけに弟も弟なのですか・・・）

呆れと脱力感で今の顔は相当酷い物である事が、自分でも分つた。偶然と言うのには性質の悪い合致であろう。執事は思わず大きなため息を一つついた。

「む？なんだ、もしかしてあの子供じいやの知り合いだつたか？」

「ええ・・・不本意ながら、知り合いかと思われます。」

夢であつて欲しいですと執事は、珍しくもその顔を引きつらせながら頃垂れた。

始まったのは外側の日々  
サヨウナラ。これでお別れだけど、どうか、オゲンキ♂テ。

今のこの気持ちに名前を付けるのならば、一体何なのだろう。

驚愕、感謝、安堵、嫉妬、恐怖・・・

こんなにも、“他人”が頼れる存在であるだなんて知らなかつた。自分に出来なかつたことを悠然とやつてのける存在に少し畏怖を感じたのは愚かな事だろうか。

そう思つほどに、自身の世界は狭かつた。

\* + \* + \* + \* +

この世界には、その存在を排除するよつに付く事が無いよつにと作られた牢獄が二つある。

その一つが、この目の前に聳える背の高い塔である。

一際目立つ存在ではあるものの、塔の天辺は日の光が邪魔をして視界に入れるのが難しかつた。

「つ・・・ハアハア・・・」  
「じじでしか？」

城からある距離の所為で、刹那の息は上がつていた。

心臓にサフィアがあるお蔭で動悸は穏やかなのがせめてもの救いだが、息切れはどうにもならなかつた。

一方、不思議そうに塔を見上げるニルギリ

華奢な体の何処に体力があるのだろ？

息切れ一つ無く変わらない様子のニルギリに刹那は声は出さずとも驚いた。

（こいつ見た目と違つて……）  
やはり、子供といえども力の強く流れる様な綺麗な魔力があると言われる王族が召喚しただけの事はあると言う事なのだろうか。

そんな観察するような主人の眼差しに気付く事無くニルギリは刹那の手から離れると、長い袖をまくつて手を出し直接塔に触れながらペタペタと調べ始める。

のほほんとした様子からは想像もつかない真剣な様子に刹那は口を挟めなかつた。

「この塔からネガイボシの氣配がしゅるでし」

「ネガイ・・・ボシ？」

「そうでし！ ナガレボシとも言ひでしけど。」

ナガレボシとは空に浮かんでる星が落ちてくる事だろ？

（一体、それが何に関係があるって言つんだ……）

ニルギリの発言に刹那の頭にハテナが浮かぶ。

「あれ？ 知らないでしか？？」

「ああ。」

「ネガイボシって言つのは空から落つこちてきたお星様の事でし。

ネガイボシには願いを叶える力が宿つてゐるんでしょ。

だから、ネガイボシを拾つた人は願う事が出来るんでし。まあ、

願いが叶うには条件があるんでしけど……

「それじゃあ……！」

その拾つた奴が葎那を苦しめるよつ、殺すよつ願つたつて事か！

！」

刹那の言葉に大きな目を細めるニールギリ。

「うーん。叶っては無いみたいでしょ。ネガイボシは願いを叶えると消えるんでし。

でも、確かにここにはネガイボシがあるでし。だから・・・

「じゃあ！何で律那は苦しんでるんだよーどうすれば・・・

「ひひやつ、おつ、落ち着くでし・・・」

前回の事を思い出したのか、刹那の勢いに顔を青くしてニールギリは後ずさつた。

両手を前でブンブンと振りながら塔に背を預け、顔からは冷や汗が落ちる。

「ええっと、あの、その・・・あれ？」

しどろもどろに焦るニールギリの表情が変わった。

そして背中をピタリと塔にへばり付いた状態から抱きつゝ塔にへばり付いた。

ニールギリが何かに気付いたように顔を覰める。

刹那を無視する形で体全体で原因を探っているようだ。

そんな様子に刹那は眉を寄せるが何も言わなかつた。

「詳しきはニールも分らなーいし、もつと調べないと何とも言えないと  
しけど

「うーん。やっぱり・・・この塔気持ち悪いでし

頬を塔にぐつ付けている状態のニールギリは言葉通りに顔を青くする。  
( 気持ち悪い？ )

塔に気持ち悪いだなんて感じた事は無かつたし、塔に居ても刹那には辛いとも何も感じなかつたと言つたニールギリは感じじると言つのか。

「律那しゃん？でした？」の塔に面するんでしょね。」

「？ そうだ。」

「こんな所に居たから・・・うん。

ニルが思うに律那ちゃん？は関係無いんでし。

だつて“この塔からネガイボシの気配がしゅる”んでしかり。  
「・・・どういひ事だ？」

「だから、

塔にネガイボシの願い・・・呪い？ が掛かってるんでし

「は？」

「ようは、律那ちゃんは巻き込まれてるだけでし。この塔に居るから辛いんでし。

・・・引っ越しは直るんじゃないでしか？」

「・・・」

考え方もしなかつたあまりの解決策に刹那は声が出なかつた。

塔は口を開ざし何も語らない。  
それは君の為じやない  
しかし、“他人”にとつては雄弁で

俗世から切り離された塔に似つかわしく無い、ドタドタと荒々しい足音が聞こえる。

こんな風にやつてくる人は一人しか・・・

(一人じゃ・・・無い?)

聞こえる音はいつも聞きなれている音ではなく、葎那の耳に不協和音を放つていて、聞こえた。

こんな場所に来る悪魔などたつた一人しか存在しないというのに何故

(どうして?)

今や僅かでも動かすのが億劫な重い体をベッドのから持ち上げると、葎那は黒い感情が湧き上がつてくるのが分った。

深呼吸を一つ

したつもりで、口から出て来たのは重い重いため息だつた。

段々と大きく近づいてくる騒がしい音。

好きだと思ったこの瞬間が、苦々しい思いと共に頭に響く

(カウント・・・三、二、一)

「・・・葎!」

バンッ、と息を切らしながらも嬉しそうな笑顔で勢いよく扉を開け放つ刹那が居た。

「えつ、えつと、葎那しゃん?」

そして、その後ろに不協和音の元凶であるあるいは同じ年位に見える可愛らしい子供が居た。

(ああ、全部律の為なんだね・・・)

悪魔ではありえない羽の無いその姿に、全てを悟る。

「いらっしゃい。せつちゃん・・・と・・・」  
だけど、律那は笑うことなど出来やしなかった。

\* + \* + \* + \*

「律！この塔から出るぞっ！..」

「行き成り何を・・・」

「そうでし、引っ越すでし。」

状況を理解していない律那を置いて刹那とニールギリは荷造りを始める。

元々、物に執着の薄い律那だから部屋に物は少ない。

大きめの袋に詰め込む物など刹那の人形と少しの日用品くらいなものだった。

「ちょっと、何なの。それにその“しつぽ”は何?」

「しつぽ、し、しつぽって二ルの事でしか・・・！」

大きな目に涙を潤ませられたつて、初対面であり名前を知らないのだから律那には呼ぶに呼べない。

分ったところで、大好きな刹那の近くに居る奴をちゃんと呼ぶ気は律那にはこれっぽっちも無いのだが。

こんなちんちくりん、しつぽで十分だという思いが律那の大半を占

める。

(なんかムカツク、気に食わない。)

唯一執着している刹那を取られた様な気がして、律那はイラついた。

「ああもうー説明は後回しだ。黙つて俺に着いて来いつ！！」

袋に詰め終わった刹那はそれを背に担ぐ。

嵩張りはするが、殆ど綿だ。見た目よりはずつと軽い。

刹那は律那を見、動くのが辛そうだとどうのを感じて袋を預けて自身で担ごうかと思ったが二ルギリを見てやめた。

(何なの・・・)

「行くでし！」

元気な掛け声と共に軽々と二ルギリに担がれた事に律那はギョッとしました。

華奢で力など無いような奴が、身長が変わらない人を持ち上げているのだ。

律那は驚きと苛立ちが顔を染めるのが分った。

止めさせようにも動きの悪い体が憎らしい。

ならば言葉で反論を・・・とも考えたが、すぐに律那は馬鹿らしくなつた。

(もう、どうにでもなれば良いよ・・・

何で、律那がこんなちんちくりんに悩まされなくちゃいけないの)地に足が着かない不安定な状態で律那は思わず脱力し、諦めた。

そして、抵抗と足搔く事を投げ出した。

「よし！」

刹那は二ルギリの可笑しさに驚いては居ないようだった。  
律那の為に刹那は使い魔を召喚した。

それは説明されなくても頭の良い律那には分った。

そしてすぐさま律那の元にやって来たことだろ。

ならば、ここに来る前にその非凡さをその力を發揮しているといふ事（このギザギザしつぽ、見た目によらず中々悔れないんじゃ・・・ん？ギザギザしつぽって・・・）

ふと、律那の頭に何かの書物で読んだ一文が思い出される。

羽の形をした羽耳、ギザギザの尻尾、容姿の色素は茶系・・・すべてがこのニルギリの特徴に当てはまつた。

（まさか、夜羽族？嘘でしょ、これで精霊最強種・・・！）

ニルギリに担がれながら階段を降りる最中、律那は開いた口が塞がらなかつた。

少なくとも、君の事は。だって、ムカツクでしょう？

この塔を降りるのは、いや、この塔から出るのはどの位ぶりなのだろうか。

出られるとは思っていなかつた。いや、出ようとすら思っていなかつた。

自分で動こうとしなかつた。

長い間、無意味なことなど数えなかつた。

前を歩いている者も、自身を担いでいる者も  
何もかも自分で進んで、掴んで、作っていく者達だろう。  
その眩しさに、目眩がする。

案外、今までの生活が自分の一部になっていたことを感じ、律那は  
自嘲した。

自分は自身の足で進むことが出来るのだろうか。

地面と言つ物が、酷く久しぶりだった。

\* + \* + \* + \* +

塔の下は場所だけに人の寄り付かない所だが、人目を気にしてキヨ

口キヨ口している一人の様子はまるで泥棒、もしくは誘拐犯だ。刹那就は大きな袋を背負っているし、ニルギリはこの国の“王子様”を担いでいるのである。

実行犯の年齢が低いだけに怪しい、と言つ以前に何とも滑稽な図ではあるが。

そう想像して、盗まれている最中である宝物に位置する刹那就は何とも言えない気持ちになった。

「刹那就しゃま！これからどうするんでしか？」

「せうだな、とりあえず刹那就を俺の別荘にでも隠して……」

ボク　・　×　　み

「ねえしつぽ、下りしてよ」

「・　・　・しつぽ」

文句を言つようにニルギリはしつぽと咳く。

すぐに行動に移そうとしないので思い切り尻尾を引っ張つてやると渋々刹那就を下ろした。

久しぶりの地面は重い体に悩まされる刹那就にとつて硬く反発し、踏ん張らなければ搖らいでしまう気がした。

重力のままに地に座りたい気になつたが、そんな様子はおぐびにも出さない。

もちろん、刹那就のプライドに賭けてふらつくなどと言つ事はない。

「葎、無理すんなよ。」

慌てて刹那就が駆け寄つてくるが無視した。

ニルギリがもう一度担ごうとするように伸ばした手を叩き落とす。

そんな物よりも律那には気になるものがあった。

あ ル × × • 名

(ノイズ?)

「律那ちゃん、調子はどうなんですか?」

「そうだ! 塔から出て何か変わったか?」

心配と言う名の感情を向けられて酷くむず痒かつた。  
あからさまに他意の無いその感情を嫌だとは思わない。  
が、律那自身向けられたいかと言われば否だ。

口には出さないが、放つて置いてくれれば良いのにと思わなくも無いのが本音だ。

(・・・塔から出て?

体は相変わらず重いし、軋むし、動きにくいし  
あれ、でも・・・そう言われてみると・・・

「・・・体は重いけど、息苦しくなくなつたね。それに、悪い感じはしないよ。」

確かに塔を出て何かが変わつたと、律那は感じる。考えれば、考  
えるほど意味が分らなかつた。

もう一人得体の知れない自分が入り込んできたような・・・  
否、自分以外の感情が流れ込んでくるようだ。  
(何、何なのこんなの知らない。)

安堵、開放感、達成感、歓喜

## うれしい

「何これ、出られて“嬉しい”なの？」

流れで伝わってくる物に、悪いものは感じない。  
確かに律那自身、塔から出るのが久しぶりで開放感があるのは否定しない。

（だけど・・・）

出たことに律那は嬉しいとは感じない。  
うつかり流されて外まで出てきてしまったが、今まで出られるのに  
態と出なかつたのだ。

何故なら連れ出したら刹那が罰せられるから。  
刹那が苦しむのに繋がる行為を律那がどうして嬉しいと感じる」と  
が出来るのだろうか。

「・・・律は“嬉しい”・・・の？」

「律那」

う　れ　し　い　　よ　　×　　名前　×　　・　　×

律那の意思とは関係無く、一筋の涙が零れ落ちた。

初めて見たといつても過言ではない律那の涙に刹那は息を呑んだ。

胸を押さえて考え込む律那は、眉を顰める刹那に気付くことができなかつた。



Paranoia症候群の成れの果てへ  
誰かの声が木靈する

「それで？」

「それで……？ なんだ？」

少しは良くなつたと言つても、未だ青白い顔をしぶらつきそうな葎那に刹那はハラハラさせられるのだが  
言われた言葉に首を傾げた。

「だから、この先の話し。

葎がせつちゃんの別荘に行くのは構わないけど、この塔どうするつもりなの？」

「・・・」

何も考へていないと言つたら、葎那は怒るだろうか。  
葎那救出という言葉しか頭に無かつた刹那に事後処理の事を言われても口を開けるわけが無かつた。  
ジト目で見られても困る。

「じゃあ、ニールが何とかしゆるでしょ」

「しつぽが？」

どうやら、“しつぽ”で名前が固定されてしまつたらしいニールギリを葎那は心底嫌そうに見る。

その強い視線にニールギリはたじろぐが、刹那にとつてしてみればこの位の視線はまだ甘いほうだ。

基本的に他人と言う存在が嫌いな・・・と言つよりは無関心な葎那にとつて、視界に入れているだけでも奇跡的だ。

刹那、それ以外は他人。その一つしか区切りが無い葎那がこつも話

すのは本来ならば珍しい事である。

「ニルにお任せでし！」

ドーンと胸を張るが、如何せん頼りない。  
そんな一人の視線に気付きもせず、行動に移すニルギリ。  
何をするかと思いきや、キヨロキヨロと辺りを見渡すと手ごろな石  
を拾つてくる。

「おい、その石で何する氣だ？」

「まあ、見ててくだしゃい刹那しま。」

ニルギリは石を片手にしゃがみ込むと、落書きをするかのように地  
面に線を描いた。

それは何か模様や文字を描くのではなく、グルッと塔の周りを一周。  
塔を囲むように円を描く。

「巻き込まれないよう、しゃがつていってくだしゃいね・・・」  
「・・・？」

ニルギリの行動に頭にハテナを浮かべながらも、言われた通りに下  
がる刹那と葎那。

きっと、何か予想外の事をしでかすに決まってる。  
たつた少しの経験を経て、二人は同じことを思った。

そして、ニルギリは大きく息を吸い込む。

＼　＼　＼

夜羽に伝わる歌だろうか、メロディになつているのは分つたが何を  
言つているかまでは悪魔の一人には分らなかつた。  
力強いわけでは無い、纖細な音でも無い・・・

か細いそれはどこか消え入りそうである様にも聞こえた。歌と言うよりも詩を詠んでいた。

その声に呼応して円の中の地面だけが揺れる。海の波のように緩やかに、しかし一定に波紋を

そして地の色が土の色から黒へ変わる。

先ほどよりも揺らぎは少なく、何だろうと二人は目を凝らした。

の黒い円に沈み飲み込まれた。

と言つ表現が正しいのだろつ。それはもつ勢によく落下した。

塔を飲み込んだそれに  
跡形も無かつたかのように傷跡一一残さず  
地の色に帰る。

# 一瞬、ほんの一瞬の出来事

その瞬間を見ていたからこそ、落とし穴に落ちたようだと表現出来るものの

ただ、跡形も無く消えたようにしか見えなかつた。

二人はその場を見、お互の顔を見合させ、また跡地を見

「「はああああああああああああー!?」」

双子の叫び声だけが何も無い地に響いた。

\* + \* + \* + \*

魔界城内、見晴らしの良い杏那の自室。

杏那は専用の椅子に座り、書類に目を通す仕事をしていた。

(全く、何だつてアタシがこんな仕事してるんだか……)  
母親に修行だと言われているものだが、嫌な仕事を押し付けられる  
いるようにしか見えない。

一体何の修行だと、彼女に問いただしたのなら「花嫁修業だ」と訳  
の分らない事を言い出すに違いない。

母親は早く嫁に行つて欲しいらしいのだが、杏那自身嫁に行く気な  
ど、さらさら無かった。

「はいはい。そんな嫌そうな顔しないでくださいよ。マスター。

一旦休憩にしましよう」  
そう言う執事の言い分ももつともだらつ、杏那は知らず知らずに眉  
を寄せていた。

二口二口、杏一や一やと笑う執事に溜息が出た。  
内心面白がっているのだろう、杏那が悪戯苦闘している様が。  
言葉が素直な分、表情が素直では無かった。  
器用なのか不器用なのか分らない人である。

執事の手に持ったダージリンがふわりと香る。

「ダージリンか……」

「好きでしょ? 貴女はこの紅茶が一番。」

「ああ・・・、ありがとう。」

自分の周りは穏やかだ、と杏那是感じる。

こうやって、こういう些細な時間が續けば楽なにとも思つ。  
しかし、葎那の事、先ほど見た刹那と居た子供の事……  
どうにもこの先厄介事が多そうな予感がした。

椅子を回転させ後ろを振り向くと、見えるのはいつもの景色。

きっとあの視線の先の塔では葎那が苦しみ、刹那は救おうと必死になっているのだろう。

瞳を閉じてゆっくり息を吐く。

そして、再度瞳を開けたとき・・・

（可笑しい・・・疲れてるのかアタシは・・・）

画面を裂ぐかの様にその存在を主張する塔が見えないという事実から、椅子を戻し視界から追い出すことで目を逸らした。

脳内オーバーヒートとその先に  
明るい未来が待っている・・・はず

助けて  
見つけて  
忘れないで  
存在を認めて

・・・名を呼んで

長い長い年月を経て、思ひが変わる意思が変わ  
る願いがまた変わる

\* + \* + \* + \* +

ポカンと開いた口が塞がらない双子

そして、良い仕事したと言わんばかりに胸を張るニール、ギリ  
その一つが対極過ぎて見ている者がいたら滑稽に映つたことだらう。

刹那の手から荷物が落ちた。

「おー！塔はどうなったんだっ――！」

フリーズから抜け出した刹那はニールギリに近づき指を指す  
「つひやつ、二つ、ニールの世界に持つてつたでし・・・・  
「は？ニールの世界？」

自身ですら分かっている事だが、むろん刹那の頭の回転は速くない。

抽象的に言われたつて分るはずがなかつた。

やれやれと葎那は予想外のニルギリの行動に溜息をついた。

「しつぽの世界・・・よつは、別次元にそのままそつくり塔を移動させたつて事でしょ。

空間移動の魔術の一種だよ。・・・しかもかなり高度の・・・「葎那はてつきり、塔を攻撃により破壊するのではないかと薄つすら予想していた。

なんたつて精靈最強種だ。攻撃力はピカイチだろう。

しかし、その予想の斜め上を行く行動には溜息しか出てこなかつた。

「そうでし！ 駄目だつたら持つて帰つて来ましゅけど・・・」

「いや、いい。問題無いよ。」

葎那はあつさりと否定した。

塔をただ破壊したなら物音も残骸も残る。

しかし、この方法でなら何一つ痕跡が残つていないので。

この塔をわざわざ視界に入れようだなんて悪魔は余程の物好き以外さほど居ない。

ならば、騒ぎになるのも必然的に後伸ばしになるだろつ。それに越した事はない。

「葎がそう言うなら、問題無いんだろけど・・・」

「うん。大丈夫」

「そうでしか・・・！ 良かつたでし。」

あからさまな態度でホツとするニルギリ。

ニルギリが選択した方が最善の判断だったと言つのはあえて口に出さない。

調子に乗るだけだ。

「塔から離れた・・・否、塔が存在しなくなつたから大分楽だよ。なんたつて原因が消えたからね。今の問題は寝込んでて体力が落ちてるくらいだね。」

「・・・つーそつか！じゃあ・・・」

「助かつた・・・よ。ありがとう、せつちゃん・・・・・・・・・としつぽ。」

その言葉に刹那は崩れ落ちた。

今まで張り詰めていた糸が切れたようだ。

不安だつた物が軽くなつた。諦めないで本当に良かつた。守れた、守る事が出来たのだ。大切な片割れの存在を。

「・・・泣かないでよ、せつちゃん。ほんと泣き虫なんだかい。」  
律那の手が刹那の頭を撫ぜる。

その手つきがたまらなく優しくて、刹那はもつと泣きたくなつた。

「ばかっ・・・泣いてなん・・・  
「ひえええええ！刹那しやま、泣かな・・・でっ、ううー..  
お前が泣くなよ。」

ニルギリが刹那に飛び付いて泣く。

そんな使い魔の姿があまりに幼く滑稽で笑いが零れた。

凄い事をしていると言うのに、それを全く感じさせない。

やはり大物を召喚したと刹那も律那も思つた。

しかし、律那にとつてはやはり面白い事では無かつたのでニルギリを刹那から無理矢理引き離した。  
パつと出の奴が、二人の絆の中に入つてくるのは良い気分がしなかつた。

「ありがとな、ニル。流石俺様の使い魔！」

「はいでし！」

「まつ、せつちゃんの使い魔なんだからこれ位は出来て当然だよね。

」

久しぶりに漂う穏やかな空氣に、心の底から笑えた気がした。

今まででは想像出来ないくらいの楽しそうな笑い声が何も無い地に響いた。

Day of outside

人はいつも自由を求めて、人はいつも自由にならない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6333m/>

---

Story.01 黒のプレリュード

2010年11月14日02時50分発行